
マジ ぼわ

もずく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジ ぽわ

【Nコード】

N3977Z

【作者名】

もずく

【あらすじ】

気がつけば慣れ親しんだ世界はその姿を大きく変えていた。僕だけをとり残して。ある朝を境に激変した世界。それになんの疑問も抱かない人々。突然家に訪れた小人のおっさん、存在するはずのない大陸、当たり前前のように生活に溶け込むエルフ。いつの間にかこんなファンタジックな世界になった！?!?!?!?!自身を取り巻く環境の変化についていけない主人公・秋山千秋と、彼に目を付けた天才少女・東雲紫乃が織りなす異色の異世界ファンタジー。

プロローグ Ⅰ (前書き)

この小説はフィクションです。

この小説に登場する団体、人物、国家、製品、その他ありとあらゆる固有名称は実在、或いは歴史上すべてのものとは、名称が同一であつても関係がありません。

ブローグ Ⅰ

寂れた商業ビルの外階段を駆け上り、勢いよく屋上に飛び出る。障害物が消え、広くなった空を見上げると、放物線を描きながら、西に向け凄く速度で飛ぶ”何か”の姿がはつきりと見える。辺りを包むのは、甲高い耳鳴りのような音と、旅客機が目の前を通り過ぎていくかのような轟音。

音源は白い尾を引きながら、瞬く間に西の地平線の向こう側に消えた。

次の瞬間

白い光に世界が包まれた。

「うわぁっ……はぁ、夢か。」

静まりかえった自室のベッドの上で、安堵のため息と共に、思わず一人ごちる。

先ほどとまでいた屋上とは違う、いつもの見なれた自室を見渡し、自分がいる場所を再認識する。

ノートパソコンが乗った勉強机と本がぎっしり詰められた本棚。自分が座っているベットの対角線上には姿見付きのクローゼット。部屋の中央には天板がガラスでできたシンプルな丸型の台と二人掛けのフロアソファ。

まぎれもない自分の部屋だ。

それにしてもいやにリアルな夢だった。未だに夢の淵を行ったり来たりしているようで、おまけに頭に霞がかかったかのようにぼんやりとする。

別段暑い訳でもないのに、それこそ階段を全力で駆け上ったあとの

ように汗に濡れている。

顔に貼りつく髪と、水分を含んで冷えた寝巻が、体にのしかかる疲労感と相まって、いつそこの不快感を覚える。

辺りは真つ暗で、今が夜更けなのか、それとも明け方なのか、窓の外の風景を見ただけではいまいちはつきりとしない。

枕元のデジタル時計に目をやると4:19と表示されている。

仕様上夕方なら16:19と表示されるはずなので、今は夜明け前だということになる。

今日は、世間でいうところのゴールデンウィークを目前に控えた、最後の平日である。

この時期だと日の出まであと1時間弱、行動を開始するには早すぎる時間帯だ。

かといって、寝なおす気分にもなれない。

汗に濡れて貼りつく寝巻が気になると、普段5時に起床しているため、寝るには中途半端な時間だったからだ。

仕方がない、いつもより少し早い、そろそろ起きるか。

汗を吸ったTシャツを代え、上から有名スポーツメーカー製の濃紺のジャージを羽織る。

ズボンも上とセットのジャージにはき替え、水だけで軽めに顔を洗
い歯を磨く。

溜まっている汚れものを洗濯機に放り込み、適当に洗剤と柔軟剤を
入れて洗濯機のスイッチを入れる。

一通りの準備を終え、スポーツタオルとポータブルミュージックプ
レーヤーを手に、玄関へと向かう。これから、毎朝の日課であるラ
ンニングをこなすためだ。

出発時間はいつもより少し早い、それ以外はいつも通り、家を出
発し、近所の河原にあるジョギングコースを中心にランニングを行
う予定だ。

愛用のスポーツシューズに足を通し、ほどけないよう少しきつめに
ひもを結ぶ。

BGMを決めつつイヤフォンを耳にいれ、さあいくぞと腰を浮かせ
たとき、

なんの前触れもなく激しい眩暈に襲われた。

転倒してけがをしないようにと慌てて腰をおろし、手について体を
支える。

世界が歪む。頭の中が掻き回され、五感が何者かに乗っ取られたよ
うな気さえする。平衡感覚を取り戻すまでの間を、襲い来る不快感
と戦いながらそのままの姿勢でなんとかやり過ごした。

以前から眩暈に襲われることもたまにあったが、生活に支障をきた
すほど酷い訳でもない、体質のせいだと割り切って過ごしてい
た。

起立性低血圧、いわゆる立眩みというやつで、脳に障害があったり

神経系に問題を抱えている訳ではないから放っておいても心配ない、と医師のお墨付きも貰っている。今回の眩暈もおそらくその類の症状なのだろうが、なにぶんあそこまで酷い症状は経験したことがないため、いつものことだと流すほどに楽観視はできなかった。もし今後何度が繰り返されるようなら、病院での受診を考えた方が良くかもしれない。

眩暈が収まった直後は結構気持ち悪かったが、様子見のため5分くらいじっとしていたらすんなりと回復したみたいだった。

幸いなことに、症状を引きずるようなこともなく、心身ともにこれといった異常も見られない。走っても支障はないだろうと見当をつけ、家の鍵をかけたことを確認し、予定通り日課のランニングを決定するべく家を後にした。

ランニング自体は体力維持を目的としたもので、特別体を鍛えてどうこうする予定も今のところない。負荷がかかり過ぎない程度のスピードを維持したまま、大体1時間くらいを目安に走る。

中学時代は運動系の部活動に所属していたが、高校に入ってから以前のように激しく運動する気分にもなれず、帰宅部を貫いている。貫いている、と言ったら確固たる信念でもあるかの様に聞こえるが、そんな大層な理由があるでもなく、事実在即した言い方をすれば、仮入部期間に適当な部活を見つけることができず、乗り遅れた惰性で今のポジションに甘んじている、ということになる。

そついった背景から、部活を引退して以来数カ月運動とは無縁だっ

た訳だが、みるみる衰える体力に危機感を覚え、今年度に入り、高校入学とほぼ同時期にランニングを始めた次第である。

運動自体はどちらかと言えば好きなので、体を動かす楽しさも相まって意外と続いている。

早起きも得意で、受験期間中早朝に勉強をしていた事もあり、別段苦にはならなかった。

ここ最近、家を出発するころには空もだいぶ明るくなってきて、河原に出れば、朝日を背負う閑静な住宅街が作りだす幻想的な光景を拝むこともできる。

今日はいつもより早い時間に家を出たため辺りはまだ薄暗く、いつもと異なる光景に少し新鮮な気分になったが、それでも折り返し地点に差し掛かるころには辺りも充分明るくなり、駅に向かう会社員や学生の姿が散見されるいつもの光景を取り戻していた。

家に着いたのは、BGMに選んだアルバムが丁度終わったときだった。時刻はまだ6時前、いつもより30分程早い。

玄関脇の置物の下（いつもの場所）に隠した鍵を取り出し、ドアの鍵穴に入れて回す。

手ごたえがない。

試しにドアノブを回してみると、すんなりとドアが開いた。

諸事情により今朝は家に誰もいないから、家族の誰かが開けた、ということはないはず。

こんな早朝に空き巣もないだろうし、家を空けるとき鍵をかけ忘れたのだろうか？

確認したような気がしないでもないが、まあそういうこともあるだろう、と軽い気持ちで家に入る。

「よう。」

見てはいけないものを見たような気がして、思わず一度開けた扉を閉じた。

いやいやいやいや、違う。見間違いだ。そんなわけではない。

大きく深呼吸して、もう一度ドアを開ける。

「よう。」

……デジャヴだ。

どうやら見間違いではなかったらしい。

目の前には三和土を上つてすぐのところに腰掛けた”小さな”おじさん。

どうやらこの人に挨拶されたらしい。

緑色のジャージの上下にたるんだ肉を仕舞い込み、よれよれの白い肌着と、これまたよれよれの白いソックスを装備している。髪毛の生え際が後退した頭と、無精ひげを生やした顔は、どこかの橋の下か公園で見たことがあるような気がしなくてもいい。

容姿だけ見ると別段おかしいところもない、ただのだらしない中年のそれだ。

明らかにおかしいのはそのサイズ。

座ってるからはつきりとは分からないが、背丈はおそらく30cmくらいしかない。

130cmではない、30cmだ。

下手したら玄関に並ぶ靴の方が大きいかもしれない。

体の各パーツも同様に小さく、商業用の人形に見えないこともない。メタボのみすばらしいおじさんのフィギュアが、いったいどの界限に需要があるのか甚だ疑問ではあるが。

ともかく、そんなミニマムサイズのおじさんが、我が家の玄関に鎮座していた。

突然の理解の範疇を超える出来事に面喰い、呆気にとられて佇んでいると、件のおじさんが口を開いた。

「ここ、秋山 紅葉の家であつて？」

「……あ、ああ。」

容姿に氣を取られていたせいで、話しかけられたことに気付くのに時間がかかり、質問に答えるのがワンテンポ遅れる。
どうやら相手は日本語が話せるらしい。

アキヤマ
秋山 紅葉。

2つ下の、血を分けた妹の名前だ。
どう鼻屑目に見ても変人なのだが、何故か老若男女を問わず慕われており、近隣住民や中学の同級生からはカリスマ的な支持を集めている。

高校でも結構有名で、何気ない世間話で名前を耳にすることも多い。
どうやら、妹に用があつてここにいららしい。物取りではないよう
で少し安心。

……いやいや、安心じゃない。人心地ついている場合でもない。この期に及んで物取りかどうかなんて些細なことどうでもいい。いやどうでもいいという訳でもないけど、むしろ警戒するに越したことはないけど、今考えるべきはそんなことじゃなくて。

「ということとは、ここが正解か。
…… ああええつと、申し遅れました。私、森永 グリコと申します。
以後お見知りおきを。」

「……秋山 千秋です。こちらこそよろしく。」

さつきまでの碎けた口調から一転、慇懃に自己紹介をされ、思わずテンプレートな挨拶を返す。
自宅の玄関での会話にも関わらず、グリコと名乗った小人に、完全にペースを握られている。

いや、だから今はペースなんてどうでもよくって。

いったいなんだこの生き物は。

そういえば以前、とあるテレビ番組の都市伝説をとりあげるコーナーで、小さいおじさんと出くわした、という話を聞いたことがある。詳しくは覚えていないが、いつの間にか現れ、いつの間にか消え、見かけた人は幸運が舞い込む、といった内容だった。

聞いたことがある、と言っても、座敷わらしと何が違うのかと聞かれれば、何が違うんでしょうねえ、と返してしまう程度の知識しか持ち合わせていない。

しかし、少なくとも都市伝説上のおじさんに、初対面の家に無許可で上がり込み、住人と自己紹介付きで挨拶を交わし、そのうえ家族構成を尋ねるほどずぶとい、もとい社交的な設定はなかったはず。

「突然申し訳ない。呼び鈴を押しても誰も来ないし、どうやら皆さん寝ているみたいだから、勝手に上がり込ませて貰った。
ところで、紅葉ちゃんはまだお休み中かい？もし起きているなら呼んできて欲しいんだが。」

こちらの混乱をよそに、先ほどの碎けた口調で要件をつたえるグリコ。

基準はよくわからないが、場面によって丁寧な口調と使い分けているのだろうか。

話し口から察するに、紅葉がこの家にいるという前提で話を進めて

いるようだ。

しかし、残念ながら紅葉は今この家にはいない。

「妹なら今出かけています。要件があるなら伝えておきますが。」

不可解な事態から来る動揺をできるだけ表に出さないように気をつけながら、不自然にならない程度に丁寧に、しかし紅葉の現在地や帰宅予定日などの情報を与えないよう注意してグリコの間に答える。

それを聞いたグリコの顔が、面倒くさいという感情を前面に押し出しながら露骨に歪んだ。

どうしても直接紅葉に会いたかったらしい。

相手によつては非常識ととられてもおかしくない早朝のこの時間帯に、こうやってわざわざ出向いたのも、確実に家にいる時間を狙つてのことだろう。しかしその目論見も外れ、ただの徒労に終わってしまったことへの不満感がその表情から惜しげもなく滲み出ていた。

「うーん、まじか。なら週末辺りにもう一度出直すことにするわ。

今度はこんな早朝じゃなくて、夕方頃訪ねさせてもらうんで、紅葉ちゃんにもよろしく伝えといてくれ。」

相手方も、どういう要件かを言うつもりはないらしい。

こちらが何かを質問する間も与えず、「では、失礼。」と言い残し、煙のように消えてしまった。

「……はあ。最近の小人は瞬間移動ができるのか。」

現実離れた出来事の連続に、無意識にため息がでてくる。
とりあえず冷静になって今朝の出来事について考えてみる必要がありそうだ。

ブローグ 1 (後書き)

誤字脱字や読みにくいなどのご指摘、感想お待ちしております。

ブローグ Ⅱ

僕の妹、秋山 紅葉には、放浪癖のようなものがある。

小学校を卒業する少し前から、まとまった休みがあると一人でどこかに出かけてしまい、数日間家を空けることが多々あった。

”放浪癖のようなもの”と言ったが、ふらつと出て行ってふらつと帰ってくる感じではなく、自分でしっかり期間を決め、必ず期限内に帰ってくるので、ニュアンス的には放浪というより渡りの習性の方が近いかもしれない。

今日、この家に紅葉がないのもそういう理由からだった。

土日休んで月曜日に登校し、火曜日からゴールデンウィーク、という今年の連休日程に何故か腹をたてた紅葉は、そのことに対する恨みと「1週間ほど旅に出ます。今週の月曜日は自主休講致しますので、中学校と担任の先生にその旨をお伝え下さい。」と綴った置き手紙を残し、土曜日の夜明け前に家を出ていった。

いつものことなので特に心配とかはしていないが、一般的に考えれば、ローティーンの女の子を一人で旅させること自体正気の沙汰とは思えない。

しかし我が家では、親は妹のことを信頼しているのか、はたまた放任主義に託^{かこ}けて育児を放棄しているのかは知らないが、自発的な行動に関しては一切口を出さないし、僕にも妹の突発的な行動をいちいち止める気が全くないので、特に問題視されるでもなく当たり前のように認められている。

そのため、わざわざ夜逃げの真似ごとをしないで誰も引き留め

ないのだが、本人が気にいつているのか、第一回目の旅のときから、ご丁寧の手紙をしたため、睡眠時や外出中を狙って家を出ていくスタイルを貫いている。

目的地は毎度ばらばらだが、さすがに国内を出ることはない。いや、” 出ることはない ”、というよりは ” 出してもらえない ”、と言っべきなのかもしれない。

そもそも未成年の出入国自体厳しく制限されており、中学生単身での国外旅行が認められるはずもないのだが、どうやら紅葉は納得していないらしく、不法出国を目論で何度か騒動を起こしているらしいのだ。

パトカーで強制送還される紅葉を出迎えた経験も一度や二度ではなく、身内としては非常に肩身が狭い思いをさせられている。

幸いなことに、彼女が企てた不法出国騒動は全て未遂に終わっているが、未遂でもれっきとした犯罪である事には変わりはない。

普通なら何かしらのペナルティーがある筈なのだが、まだ未成年なのと、手段が稚拙すぎて当面ミッションが成功する見込みがないからという、逆に不安になる理由で見逃してもらっている。

身内が前科持ちというのも何かと不便なので、こちらとしてもありがたい限りなのだが、それでいいのか警察よ、と心配にならないでもない。

ちなみに、長期休暇のたびに出国ミッションを決行しようとするので、最寄りの空港の職員からは季節行事として名物扱いされているらしい。

馴染の警察官からその噂を耳にしたときには、兄として空港職員の皆様方一人一人に土下座巡りでもしようかと思ったのだが、その

警察官に笑いながら止められて断念した。

今回はどうやら素直に日本国内での旅行を楽しむことにしたらしく、今のところ空港で荷物にまぎれて飛行機に乗り込もうとしていたところを発見された、といった旨の連絡もない。

旅先でトラブルに巻き込まれることはあれど、基本的に自分ひとりで解決できるため、よほどのことがない限り、ゴールデンウィークが明けるまでは家に帰ってくることもないだろう。

食卓に一人分の食器を並べ、焼きたてのベーコンエッグとカリッカリに焼けたバタートーストを盛り付ける。

紅葉が家にいるときは彼女が朝食を作ってくれているのだが、今日のように外出しているときは自分で簡単なものを作って一人で食

べるようにしている。

ひとりで食事を取ると考え事が増えるものだ。
それは今日とて例外ではなく、自然と先ほどの来訪者のことを考えていた。

森永グリコと名乗った彼は、明らかに世間一般に知られている種類の生命体ではなかった。

外見は、30?に満たない背丈を除いて人間のそれとほぼ同じ。
丁寧語と砕けた口調の使い分けが出来るくらい日本語の扱いに長け、瞬時にその場から姿を消すことができる摩訶不思議な力を使う。

彼と会話を交わした数分間は、これまでの人生16年間で積み重ねてきた世界観を根底からぶち壊すには充分に長すぎた。

ただか16年を生きてきた程度の知識で、世の中の全てを知った気になるつもりはもちろんないが、それでもあり得ることとあり得ない事の区別くらいは付く。

そして、あのおじさんの存在は明らかに後者だ。

宇宙人や幽霊は存在するか。

一時間前の僕がそう尋ねられたら、世界にはまだまだ知らないものがたくさんあふれているし、宇宙人や幽霊といったオカルトの類が実在してもおかしくはないだろう、なんて当たり障りのない答えを返していたかもしれない。

しかし実際に目にしたら話は別だ。

今まで存在の片鱗を見せるだけにとどめ、架空と現実の狭間を行き来していたような曖昧な存在が、こうもはっきりと姿を現し、二三言葉を交わし、あまつさえ次に会う約束を取り付けるようなことが許されてもいいのだろうか。

そういえば、脳に障害がある人には幽霊が見える、という話を聞いたことがある。

脳の視床下部や側頭葉に何らかの異常がある人は幻覚を見ることがあり、それを幽霊や神だと勘違いする人も多いとか何とか。

あまりあてにしたくない可能性ではあるが、そう考えると辻褄も合う。

小さなおじさんはそもそも幻覚で、本来ないものを脳によって見せられていたとすれば、あまり不自然な話でもない。

先ほどの激しいめまいも、脳の異常による症状の一つだと考えれば納得がいく。

可能性としてはこの幻覚説が一番有力だが、しかし、その道の専門家でもない一高校生が、ましてや自分自身の脳の異常なんていくら考えても詮無い話ではある。

念のため一度脳の検査を受けた方がいいかもしれないが、今朝の来訪者を幻覚と看做すには少し短絡的すぎるな、くらいにとどめとくのが妥当だろう。

否、もしかしたら、神や精霊の類なのかもしれない。

神に近い存在はいるだろう、と漠然と思っではいるが、特定の宗教に属して特定の神に信仰をささげている訳ではない。

その他大勢の日本人と大体同じだ。

なので、仮に彼が土着の神みたいなものだったとしてもあまり抵抗感はないし、未確認生物や幻覚なんかよりは、神が妹に会いに我が家を訪ねにきた、と言う方が話のオチとしては数倍マシな気がする。

ただ、神や精霊のような自然、ひいては世界を司る崇高な存在が、我が妹のようなただの変人に用があるとは、とてもじゃないが思えない。

犯罪未遂さえなかったことにできる彼女のカリスマ性にてられたのだろうか。

神をも虜にする人物が身内にいるとは、なんともぞつとしない話である。

思考が徐々に逸れ出したことに気付き、いったん考え事を切り上げ、いつの間にか空になっていた食器を片づける。

いずれにせよ、いくら考えたところで答えが出るような問題ではない。どうせあと何回か家に来るのだ。いずれはつきりするだろう。それまでは柵に上げておくのが上策だな。

そう自分に言い聞かせ、頭の中で区切りをつける。

時間も丁度いいことだし、そろそろ準備を始めよう。

とはいっても、残っている準備なんて殆ど無い。

ジョギングから帰ってきてすぐシャワーを浴びたので、服はそのときに着替えた。

あとは歯を磨いて身だしなみを整えるくらいか。

今朝の予定を立て、それを消化すべく行動を開始したこのときの僕は、しかしながら、ついさっき棚上げしたばかりの問題をすぐに引っ張り出さなきゃいけなくなるとは、露ほども思っていなかった。

南北に走る大きな川の東側に位置するこの町は、川を挟んだ西側に位置するオフィス街の著しい発展に伴い、ベッドタウンとしてのその人口を増やしている。

自治体の長であつた人物が推し進めてきた特区構想が近年ようやく実現し、経済特区第一号として目覚ましい発展を遂げた西のオフイス街。特区構想の実現以来多くの人が押し寄せ、昔の田園風景を呑み込んで膨れ上がった東の住宅街。

中心に流れる川を境に異なる毛色を持つ街は、お互いがお互いを支え合いながら成長してきた。

その勢いは、特区制定10周年を迎える今でも衰えることなく、地価も未だに上昇の一途を辿っている。

両者の発展に伴い、西側には歓楽街、東側には繁華街が栄え、娯楽の街としても賑わいを見せている。

経済特区。

経済の発展の為に、法的、行政的に特別な地位を与えられ、税制・福祉など様々な面で企業活動を支援するために設けられた地域だ。

この日本にも何箇所か似たような地域は存在するが、その中でも随一の発展を遂げたのがここ、九重市だった。

そしてもう一つ、この都市には、”人類の発展を担う人材育成”というコンセプトを基に、”教育特区”というものが設けられている。

東側に広がる住宅街のさらに東側に位置する、教育機関が集められた地区だ。

日本中から優秀な教育者を集め、金に物を言わせて整えさせた最新鋭の設備のもと、一般科目から専門分野まで幅広く学べる、教育の聖地として、世界中に名を馳せている。

それに、この特区内の学校に通う学生は、条件付きで費用の補助が受けられることを筆頭に、他では得ることができないような様々

な特典が与えられる。

その設備と特典を目当てに、国内外問わず世界中のいたるところから優秀な学生が集まり、開設から10年足らずして世界の教育の頂点に君臨するまでに成長した。

特区内の学校に我が子を通わせることが、世の親の夢の代名詞として語られるようになってからずいぶん久しい。

教育特区には、小学校が三つ、1000人規模の大きな中学校が一つ、高校が六つ、大学が三つ、計13校の学校がある。

小中学校には学区制が採用され、特殊な教育や制度を設けず、一般的な公立の小中学校と殆ど変らない扱いがなされている。

これは、多感な成長期を過ごす小中学校を過ぎすぎした競争の場にしたくない、という自治体の配慮で、通う生徒も近隣の住民が全体の9割以上を占めている。

とはいえ教師陣が優れていることには変わりなく、他地域の同年代の子供に比べて秀でている生徒が多いというデータもある。

どうしても我が子を入学させたいと、学区に居を構えるために押し寄せてくる教育熱心な保護者の対応に、自治会も四苦八苦しているのだとか。

一方高校・大学では、全ての人に平等に学ぶ機会を与えるべく、入学に適当な学力さえ備わっていれば、身分や出自を問わず世界中の生徒を広く受け入れる方針を取っている。

それぞれの学校には大きな特色があり、スポーツ系の学校、工業系の学校、芸術系の学校など、学校ごとに力を入れている専門の分

野がはつきり分かれている。

もちろん普通科進学校もあり、将来像がはつきりしない生徒や広い分野を学びたい生徒に対する配慮もきちんとなされている。

入学するためには厳しい試験があり、どの学校も並大抵の努力では入学できない難関校として広く知られている。

経済特区と教育特区。この地区の都市開発の根幹、特区構想の双壁をなす二大プロジェクトのおかげもあり、今ではこの街も、世界版『住みたい街ランキング』上位ランカーの常連であったりする。

そついう、世界に誇れる街、九重市に僕は住んでいる。

生まれたときから16年間、一度もこの街を離れたことはなく、小中高と順調に教育特区内の学校に通うという、誰もが羨む華々しい経歴も持っている。

しかしその実、それほど頭がいい訳でもなく、いや、中学までは成績も割と上位にいたのだが、それでもずば抜けて優れた分野がある訳でもなく、『そこそこ勉強ができる人』という当たり障りのないポジションを貫いてきた。

その特筆すべきもない平平凡凡な人間であるところの僕は、今現在、なにをまかりまちがったか”九重高等学校”という、特区内でも更に異色の、『学問の最高峰』と世界中から称賛をうける高校に通っている。

記念受験として受けた高校に運がいいのか悪いのか受かってしまい、あまりの現実感のなさに迷わず辞退しようとしたのだが、興奮した教師陣に乘せられてその気になり、いつの間にか入学届を出し

てしまっていたという次第だ。今では苦い思い出として脳内のアルバムでわりとぞんざいに保管されている。

余談だが、そんな僕に、「過ぎたるは及ばざるがごとし」と言い放った紅葉の姿が、妙に印象に残っていたりもする。

そういつた経緯で身の丈に合わないどころか場違いにも程がある高校に通っている訳だが、僕としてもドロップアウトは避けたいところなので、今のところは、高校生活を無事乗り切れるぎりぎりのラインを保ちつつどうにか過ごしている。

その九重高校、通称”九校”の1年2組の教室に入り自分の席に着くと、すでに隣の席にいた少年に話しかけられた。

「おはよう、千秋君。どうしたんだい、顔が真っ青だよ。体調でも悪いのかい？」

「そうか？別に普通だけど」

今話しかけてきたのは、マルコ・フェスタという名のイタリアから来たクラスメイトだ。

ウェーブがかった黒髪に、ルネサンス時代の彫刻のような整った顔立ち。背丈は179cm弱の僕より少し高く、体つきも暑苦しくない程度にがっちりとしていて、同年代の日本人にはない大人の落ちついた雰囲気身をまとっている。

しかもこの世界最高峰の学問機関の入学式で新入生総代を務めた

ほどの天才で、つい1、2ヶ月ほど前日本に来たばかりにもかかわらず、日本人のように日本語を扱う様は、圧巻を通り越して芸術的でさえある。

そんな一見完璧な彼にも、ジャパニーズカルチャーと呼ばれるものには目がない日本マニアという、残念な一面が存在したりする。

本場日本のオタクと比べても遜色ないアニメの知識を持ち、趣味で習字と陶芸をたしなみ、侍に憧れてイタリアで始めた剣道にいたっては道場を開けるほどの腕前を持っているらしい。

彼と仲良くなったら、二次元の和服美少女に興奮する美形イタリヤ人、という世にも珍しい景色を拝むことができるだろう。

性格も割といい加減で、一度口を開けば身にまとっていた大人の雰囲気霧散してしまうと、入学1ヶ月足らずで早くも周囲の女子からは残念がられている。

たまに世界トップレベルの天才だと言うことを忘れてしまうこともあるくらいだ。

マルコとはこの学校に入学してからの付き合いだが、馬が合うのか割とすぐに仲良くなり、学校がない日もたまに二人で遊んだりしている。

余談だが、休み時間中にまだ友達がない教室で暇を持て余し、筆ペンを使って行書体で名前を書く練習をしていたら「その筆のよいうな物で何をやってるんだい!？」とキラキラと目を輝かせて尋ねてきたマルコに、「ジャパニーズ書道」と真面目な顔で答えたら予想以上に食いつき、成り行きで習字を教えることになったのが、彼と親しくなったきっかけだ。

筆ペンを食い入るようにつめていたので、「いるか?」と渡してみたなら、奇声を上げながら抱きつかれたときは流石に少し引いた。

ちなみに、九重高校男子寮の彼の部屋に行けば、小学生が書いたような「円子」の文字が飾られているのは余談の余談だ。

「本当かい？幽霊でも見たような顔をしてるよ。H A H A H A H A」

「なにがH A H A H A H Aだ、アメリカンジョークのオチみたいな笑い方しやがって。そもそもどこに笑う要素があった」

思わず突っ込むも、天才イタリア人マルコの何気ない、しかし、それでいて正鵠を得た発言に思わず苦笑する。

実はあれから、つまりは朝食を済ませてから今までの間、小人の訪問にも引けを取らないショッキングな出来事がいくつかあった。おかげで精神的な疲労がかなり溜まっており、それが顔に出てしまっているのかと思うとやるせない気持ちになってしまふのだった。

ブローグ 3

一つ目の異常に気付いたのは、学校の支度を終え、持て余した時間を使って朝のワイドショーを見ていたときだった。

画面に映った世界地図。

その太平洋上に、ある筈のない大陸が描かれていたのだ。

その大陸は太平洋の東側に位置し、南端は赤道をかすめ、北端は日本の九州とほぼ同緯度のところにあつた。

地図で見た限り、大きさはオーストラリアと同じか少し小さいくらい、五角形を東側に少し引き伸ばしたような形をしている。

最初見たときはなんかの冗談か、製作者側のミスかと思ったが、しかし、そのことに関して説明や謝罪はなく、それどころか以降も何度か同じ地図が使われてすらいた。

いい加減違和感を感じ、他の局にチャンネルを回してみるも、どの局でも同じような地図が使われており、当たり前のように番組が進行していた。

分かったことは冗談でもミスでもないと言うことと、”パシフィック大陸”という名前が付いていることくらい。

これはさすがに幻覚で片づけることもできず、思考停止から抜け出すまで随分と長い時間を要した。

詳しく調べてみようかとも思ったが、もしかしたら他にも何かあるかもしれないと思い直し、見逃さないようテレビにかじりついていたら、案の定というかなんというか、新出語句がいたるところに

出てきた。

『大型魔獣襲撃も無傷の撃退　マジ　ぼわ戦士大手柄　負傷者なし』
『歌手　KENGO（28）　エルフ族一般女性（93）　と65
歳年の差婚』

今朝のニュースのラインナップの一部分だ。

最初は訳も分からず酷く混乱したが、家を出るころには一周回って逆に冷静になっていた。

もし仮に頭がおかしくなっていたとしても、異変がある度にこちらがリアクションをとらなければ周囲に悟られることはないはずだ。

まだ異常だと感じる事が出来るだけの判断能力も失っていないし、当面は大丈夫だろう、と何度も自分に言い聞かせた。

しかし、その努力も紅葉との電話で水泡に帰すこととなる。

登校している最中、来客があったことを告げるために、紅葉に電話をかけた。

彼女も森永グリコという名前に心当たりはないらしく、「どんな人だった？」という質問をされたので、少しだけ好奇心が湧いて包み隠さず話してみることにした。

「身長が30cmくらいの小さなみすばらしいおじさんだな。

禿げてて、ビールっばらで、上下のジャージを着ていた気がする。
僕は神様かなんかの一種だと思うんだけど、紅葉はどう思う？」

「はあ？神様？

お兄ちゃん頭おかしいんじゃない？」

うん、望んだ通りのリアクションだ。ここにきて初めて常識的な回答を得られたことに、少しだけ嬉しくなる。

妹に貶されながら喜ぶ兄の図の完成だ。

「いやな、僕もおかしいとは思ってたんだけどな、どう見ても身長は30cmくらいで……」

「だから、それ、”小人族”の人でしょ？神様な訳ないじゃん。お兄ちゃんついに現実と妄想の区別がつかなくなったの？」

「……え？小人族？」

思わず聞き返す。何を言っているんだこの妹は。会話が全く噛み合っていないじゃないか。

「だーかーらー！！小人族！！

身長30cmくらいのおっさんでしょ？どう考えても小人族じゃないん。

なに、お兄ちゃん本当にどうしちゃったの？なんかあるなら帰ってこようか？」

「……いや、そんな心配されると流石にみじめだからやめろ。ただの冗談だ、気にするな」

このときはなんとか誤魔化せたが、その後の会話は内容すら覚えていない。

さも当然のように身内の口から出てきた”小人族”という単語。あれじゃあまるで、日常生活に小人の存在が溶け込んでいるみたいじゃないか。あれは、今朝起きたあの一連の出来事は、幻覚ではなかったというのか？それとも記憶が、今まで積み重ねてきた世界観自体が間違っているともいうのだろうか。

何が現実で、何が幻なのか。
何が真実で、何が間違っているのか。

学校に到着するまで、ついぞその答えが出ることはなく、上手く切り替えられぬまま今に至る、という訳だ。

「なあマルコ」

「ん？」

結論を出すには、あまりにも材料が少なすぎた。どうにかして、自分の異常を悟られないように情報を集める必要がある。

ここはいったん幻覚の可能性を排除し、世界が変化したと言う前提で話を進める。

まずはある程度身近な人から情報を集め、事前知識を固めよう。
ネットや本で調べるならば、情報の真贋を見極めるための地が必要だ。その点人に直接話を聞く分には、情報量は劣るかもしれないが、概ね真実にそった話が聞けるはずだ。

「お前、地元で小人にあつたことある？」

あるならそれに越したことはない。ないならしないで、そこから話を広げることも容易にできる。もし予想外の反応が返ってきてても、様子を見つつ方向転換すれば訝しがられることもないだろう。

「うーん、そう言えば小人を直接見たのは日本に来てからだっただけだな。」

観光で遊びに来る人たちも結構いるらしいけど、やっぱり日本ほどたくさんはいないからさ」

よし、一発目からビンゴだ。やはり、小人は一般的に実在するものとして考えられているらしい。

このようにして、ある程度あてずっぽうに質問して反応を見ながら話を展開していけば、どうにか必要そうな情報が得られそうだ。地雷を踏まないよう気をつけさえすれば、怪我をすることなく下地を固めることができるはずだ。

「ふーん。じゃあエルフは？」

「エルフならイタリアにもいたよ」

「でもエルフもそんなにたくさんいる訳じゃないんだろっ？」

「そりゃ、日本に比べればね。」

でも、やっぱりエルフって目立つからさ。ほら、遠くの人ごみにまぎれてても、なんとなく分かるだろう？」

どうやら、小人やエルフといった種族は日本にたくさんいるみたいだ。なにか歴史的な理由でもあるのだろうか。これは調べてみる必要があるそうだな。

「まあ、エルフは男のロマンと言っても過言ではないからな」

「おお、流石千秋君。分かってるじゃないか。」

あの身にまとう神々しいオーラ、すべてを癒す慈愛に満ちた笑顔。そして滲み出るおっとりとした雰囲気。

日本人を除いて、あれほど和服が似合いそうないきものが他にいるかい？」

「判断基準和服かよ。」

そういえばこの学年にエルフいたよな？和服のこと頼んでみたらどうだ？案外快く引き受けてくれるんじゃないか？」

次は少し突っ込んだ質問を試みる。

ここで外したら危ないが、疑わせないためには相手が食いつくよ

うな話題を提供する必要がある。
ある種の賭けだ。

「男の和服見たって面白くないだろう！！やっぱり千秋は何も分かっていない！！君には失望した！！どうせ頼むんなら2年のイヴさんだろう！！」

おお、やっぱりこの学校にもいるんだ。言ってみるもんだな。マルコの様子を見る限り、どうやら不信がられてもいないようだ。

「お！？皆聞いた？」

マルコが2年のイヴさんに、和服を着てくれるよう頼みに行くらしいぞ」

「ちょッ！！ばッ！！まッ！！」

「言葉になっていないぞマルコ」

今の発言を聞いたクラスメイトがわらわらと集まってくる。

「まじですかマルコさん！！」

「さすがすマルコさん！！」

「マルコさんかけーっす！！」

「写真撮っていいっすかマルコさん！！」

「抱いて下さいマルコさん！！」

このクラス、うすうす気づいていたが悪ノリが酷すぎる。

マルコから言質が取れたと知るや否や、瞬く間に拒否できない流れを作りだしてしまった。

なんだよこの団結力。

とても知り合って一ヶ月とは思えないぞ。

「まあ、僕も付いてってあげるから。頑張ろう?」

「頑張ろう?じゃない!!そもそも僕は行くななんて一言も言っていないぞ」

「日本男児たるもの、一度言ったことは貫き通せ!!」

駄々をこねるマルコに大声で一括する。

マルコはそもそも日本男児ではない、という至極真っ当なツッコミをするものは、しかしこの場には誰もいない。

「……日本……男児?」

マルコがはっ、と息を呑み、期待と困惑が入り混じった顔でこちらを見る。

その顔には「僕が日本男児を名乗ってもいいのだろうか」と書いてあった。

それを見て「そんなの当たり前だ」と、鼻で笑う。

心なしかマルコの顔が曇る。

否定されることを恐れている、そんな表情だ。

そんな彼の眼を見て、まっすぐ、大きくうなずく。

「大丈夫、お前はもう立派な日本男児だ」と。

マルコの表情がぱあっと明るくなる

「分かった！！僕、やるよ……ってなるかあ！！
どうしてその一言で僕がつけられると思った！？
お前は僕がただけ頭が弱い人間だと思ってんだよ！！」

「いやあ。日本大好きなマルコなら『日本男児』という言葉に否応なく飛びつくだろうと踏んでいたんだが。こいつは弱ったな」

「こいつは弱ったな、じゃない。確実に成功する体で練った作戦だったのかよ。」

しかもなんだよ、『日本男児』と聞いたなら興奮するイタリア人男性って。存在そのものが事故レベルだろ。僕のプロフィールにそんなおぞましい設定を付け加えるな」

「いやいや、きっかけを与えたのは僕だが、そもそも寸劇を始めたのはマルコだろうが。とんだ出来レースである。マッチポンプもいいところだ。」

「マルコは芸達者だな。」

分かりにくいフリでもきちん処理して、怪我すると分かっているから自分で突っ込んで行くんだもん。僕には真似できないよ。

それともノリ突っ込みはイタリアのお家芸なのか？」

「みじめだからいちいち解説を付けるな！！

それに、そんなお寒い文化イタリアにはない！！」

「おうおう、じゃばにーず伝統芸能をお寒いとな。あんな寸劇までやっというてよく言うよ全く」

「こんな低俗なものを日本の崇高な伝統文化と同列に扱うんじゃない。今すぐ腹搔っ捌いて詫びろ」

「マルコ、少し誤解があるようだが”ハラキリ”は日本の文化ではないぞ」

「それくらい知ってるわ！！

君はさっきからどれだけ僕を馬鹿にすれば気が済むんだよ！！」

「えー、そこはノリ突っ込みだろ。

『えっ、そうだったの？……ってそんなわけあるかい』くらい言えるだろ。

”ノリ突っ込みのマルコ”の二つ名が泣くぞ？」

「そんな情けない二つ名があつてたまるか！！

僕をそんな安っぽいセリフを吐くキャラに仕立てあげるんじゃない！！君はいつたい僕をどうしたいんだよ！？それとも致命的な馬鹿なのか君は！！」

リアクションが大きいマルコとのやりとりは実にいい暇つぶしになる。なんというか、多岐にわたり弄りどころを持っている男なのだ。

「まあ、四の五の言わずに頼みに行けよ。マルコならできない事じゃないだろう?」

「ぐっ……」

ともかく、無事エルフの少女と会う口実を得ることができた。これようやく一歩前進だ。

ブローグ ４

HRが終わり次の授業の準備を始める。

今日の１時間目は課題研究のガイダンスだ。

この九重高校では、１年生のゴールデンウィークが明けてからすぐ、課題研究というものが始まる。

課題研究とは、読んで字のごとく、各々が興味がある分野を課題として設け、それについて１年間かけてじっくり研究、論文をまとめて年末の研究発表会でその成果を発表する、という、九重高校独自のカリキュラムの一つである。

若い時分から、興味があるものを徹底的に調べる機会を与えることで、自分の力で問題を解決し、不思議に気付く目を養う、という目的のもと開校当初に導入され、以来全ての生徒が取り組んでいる伝統文化の一つだ。

ちなみに、特区が開設されたのは１０年前だが、九重高校自体は意外と歴史が古く、数年前に開６０周年を迎えたばかりだと聞く。

独自のとはいうものの、このカリキュラム自体は別段珍しいものでもなく、大学や高等専門学校、いわゆる高専ではほぼ当たり前のようにどの学生でも取り組んでいることであるの。

それを独自のというのにはやはり理由がある訳で、つまりこの学校における課題研究には、他校には見られない特徴がある。

まず、九重高校の課題研究の特筆すべきは、２年生から自分の研究室を持つことが許されている、というところにある。

もちろん全ての生徒に認められる訳ではないが、一定以上の学業成績を修め、研究したい分野に関するプレゼンをしてその分野に近い教授数名のお墨付きを貰うことができれば、誰でも自分の研究室

を持つことができる。

先生曰く「並みの天才でも難しい」らしいが、それでも毎年数名自分の研究室を持つ生徒がいるのだから驚きだ。

流石天下の九重といったところか。

しかし、わざわざ研究室を持たなくても、研究室ごとにいくつか研究テーマがあり、その中から生徒が好きなものを選んだり、分野にそった研究テーマを研究室に持ち込んだりすることもできるため、割と自由に自分が興味がある研究に取り組むことができる。

さらに、高校に隣接する九重大学との共同研究も多く、高校時代の研究を大学生になっても引き継ぐことができる。

博士課程まで進めば、最長で9年間一つの分野を研究する事も出来る、というのも九重高校ならではだ。

たかが高校生と言えど研究している内容はレベルが高く、海外の有名な学術ジャーナル紙にその論文がとりあげられたことも少なくない。

九重が学問のメッカとして注目される所以だ。

研究室を持ったりテーマを持ち込んだりできる上級生にたいし、1年生はすでにある研究室で、上級生や教授方が取り組んでいる研究の補佐をしなければならない。

といっても、そのまま二年生になってからもその研究を継続する人もいれば、研究室自体を変えたりする人もおり、いわば本格的な研究を始める前のお試し期間のような位置付けとして捉えられている。

1年生はゴールデンウィーク前後のこの時期に研究室を決めなければならず、今日はその為のガイダンスに時間が設けられている。

とはいえ、これまでの一か月間で大体の生徒は目ぼしい研究室を決めており、ガイダンスの内容も申請方法とか、事務的な手続きについての説明が大半を占めている。

「マルコは確か宇宙工学系だったよな？」

「ああ。」

惑星探査機を作ってる研究室があつてね、そこにいくつもりさ」

マルコは特化している分野がある訳ではない、いわゆる万能型の天才だ。

世界で最も難しい試験と恐れられている九重高の入試では、合格者平均が60点台の中、全教科平均9割越えという化け物染みた成績を叩き出したこともある。

そんな彼の興味は宇宙にあるらしく、いくつかある宇宙工学系の研究室の中で「一番宇宙との距離が近いからね」という、あまり共感を得ることができなさそうな理由でその研究室を選んだらしい。

「そういう千秋はもう決めたのか？」

この前一緒に研究室廻ったときはまだ悩んでるみたいだったけど」

「ぐぬぬ」

「え？まだ決めてないンデスカ？」

急に表情が人を見下すそれに変わり、故意に片言を混ぜた日本語

で質問するマルコ。

こいつ明らかに馬鹿にしてやがる。

悔しいが、マルコの言うとおり、僕はまだ自分が所属したい研究室を決めていない。

九重高校に通う生徒の大半はすでに特定の分野に進路を絞っており、高校入学時にはすでにある程度の専門知識を持ち合わせているのが普通だ。

その専門知識を使って財を成している奴もそんなに珍しくない。

そんななか、義務教育の9年間「そこそこ勉強ができる人」のポジションに甘んじていた僕が特定の分野に明るい訳もなく、その上興味があるカテゴリというのもこれと言ってないため、所属する研究室を決めあぐねていたのだった。

「申請の締め切りは連休明けの次の週の月曜日です。
忘れないようにしてください」

「だってさ」

「わかってるやーい」

先生の言葉を使って急かすマルコに気のない返事をする。

とは言ってもなあ。

知識どころか興味すらない状態で研究なんてできるわけがない。
適当に選んで配属されたところで、だ。

協力どころか邪魔もできないような僕が同室にい居座っていては

相手方も迷惑だろう。

そういう人のことを指して英語では”Waste of space”というらしいが、場所の無駄にしかない僕は、そういう意味では、部屋にいるだけ好むと好まざるにかかわらず邪魔をしているということになるのだろうか。

思考がネガティブな色に染まりつつあるなか、そういう僕を察してか、はたまたいつものただの無駄話か、マルコが話しかけてきた。

「そつえば、東雲さんの話はもう聞いたかい？」

これから始める話の前振りに、しかし、話題の中心であろう”東雲さん”という人物に心当たりがなく首をかしげる。

「誰だよ東雲さんって。1年生の誰かか？」

僕の口からこの質問が出るのは、僕にしてみれば当然の事なのだが、質問したマルコにとってはそうでもなかったらしい。

彼の表情が呆れたそれに変わる。

「なにを言ってるんだい？」

新人生総代で挨拶してただろ、あの東雲さんだよ。

まさか千秋君が覚えてない訳もあるまいて」

「いやいや、お前こそなに言ってるんだよ。」

新入生総代はマルコ、お前だっただろうが」

確かにそうだった。

すっかり覚えていてる。

何せ入学式するとき、出席番号で一番前にいた僕、” A ” k i y a m a の隣に、” F ” e s t a のマルコが座ったいたことを不思議に思った記憶があるからだ。

余談だが、うちの学校では外国人の生徒に配慮して、学籍番号を A B C 順に割り振っている。

ともかく、その少年が新入生総代を務めるほどの天才だと知ったときの驚きと納得はそう簡単に忘れられるものではない。

「それは嫌みかい？

確かに彼女には負けたが、なんとも言ってるようにあれは仕方のないことだった。

だって彼女には、東雲紫乃には” だれも敵わない ” んだからね」

随分と大層な物言いに少しだけ眉をひそめる。

僕が知っている入学試験の結果とは少し違う、という事実は置いておくにしてもだ。彼が、マルコが、いとも簡単に、決して越えることができない壁の存在を認めたことは、僕にとってある種、それこそ新大陸でも発見したかのような衝撃があった。

「そう、誰もだ」

そんな僕の心の機微を読み取ったのか、強調するかのように、あ
るいは少しだけ熱を込めて、話を進める。

「この学校の生徒に限らず、この国の人に限らず、この時代の人
に限らず、全ての人が彼女には敵わない。

だから、僕は彼女に勝とうなんて露ほども思っていないし、入試
の成績で彼女に劣ったことも、全く、少しも気にしていない。そも
そもそんな発想すら浮かばないね。

だって、足の速さで新幹線に勝負を挑もうなんて思いつく奴、そ
れこそまだスーパーマンになることを諦め切れていない少年くらい
のもんだろ？

所詮人間がどうあがいたところで、空も飛べないし、毎秒10ペ
タ回の演算もこなせないし、東雲さんにも敵わないんだ」

なんて、君にはただの負け惜しみにしか聞こえないのだろう
けど。

そう言い放ったマルコは、本当に微塵も気にしている様子はなく、
むしろ、それこそスーパーマンの凄さを語る少年のような輝きを放
っていた。

九重高校入学試験で化け物染みた成績を叩き出したマルコをして
そこまで言わしめた東雲さんなる人物に、興味を抱いてかないと言
えば、やはり嘘になるのだろう。

「それで、その東雲さんがいったいどうしたんだよ」

僕のせいで話が逸れてしまったみたいなので　マルコもまさか東雲さん自慢がしたかった訳ではあるまい　軌道を修正すべくマルコに真意を訪ねる。

「実は東雲さん、自身の研究室を持つ許可が下りたらしいんだ。まだ1年生の彼女がそれも入学して一ヶ月もたっていないこの時期に、だ。」

今になって考えてみれば、まあ彼女にならありえない話でもないが、それにしても、天下の九重高校の伝統文化を捻じ曲げることが、たかだか一人の人間にできるなんて思いつきもしなかったよ」

知つての通り、九重高校で自分の研究室が持てるのは2年生からだ。

この伝統は、1年生と2年生の能力の差に依拠している訳ではなく、どんなに優秀な学者でも他人から学べる機会を大切にするものだ、という初代校長の方針から、他人の研究を見て視野を広げる事を目的としている。

そのため、いくら優秀な生徒がいたところで1年から研究室を持つことは例外なくできず、最低でも1年間は経験を積まなければならないシステムになっているのだ。

ところが、その例外が今年になって誕生したと言うのだ。

東雲紫乃。

一体どういう人物なのだろうか。

どういう手段をつかって、九重高校の伝統を捻じ曲げたのだろうか。

人間には超えられない、というマルコの評価も、この話が本当な

らばあながち大げさとも言えないのかもしれない……。

「おいマルコ、いい加減往生際が悪いぞ」

「あれを見れば誰だって怖気ずくだろう!!」

それとも千秋、君には彼女に集まる視線が見えないとでも言うのか!!」

今は昼休み。

僕とマルコは2年のイヴさんの教室の前まで来ている。

マルコの『エルフの女の子に和服を着て貰おう大作戦』を決行するためである。

朝宣言した通り、エルフ族の少女、イヴ・タイラーさんに和服を

着てもらえるようお願いしに来たのだ。

しかし、クラスメイトの声援を受け（よっ！！日本男児！！）、あれだけ意気揚々（？）と出発してきたにも関わらず、彼女の周囲の状況を目の当たりにして、ものの数秒で心が折れてしまったようだった。

整った、なんてもんじゃない。

あるいは、あらゆる国で祀られている美の神が力を合わせて作った最高傑作が彼女なのかもしれない。

そんな戯言の真偽はともかく、見る者にそんな感想を抱かせるような何かを、彼女は持っていた。

透き通るような白い肌に、幻想的な輝きを放つ、白みがかった金色の長髪がよく映える。

全てを包み込むような優しい面立ちに、しかし強い意志を宿したような瞳に思わず目が奪われる。

なるほど。

確かに”人間離れ”している。

教室の入口、つまり今僕たちが立っているところの割とすぐ近くに座るイヴさんの周りには、まっすぐと物憂げに、もしくは本人にばれないようちらちらと伺うように、彼女を見つめる目、目、目。

授業の予習でもしているのだろうか、髪をかきあげノートに字を書き込む彼女の一挙手一投足にクラスの教室内の男子の大半、もしくは女子の数名が見入っている。

しかし、当のイヴさんはその視線のことが気にならないのか、はたまた努めて気にしないようにしているのか、黙々とノートに何かしらを書き込んでいた。

確かに、こんな中視線の的に声をかける勇氣があるものはそうそういないだろう。

人間だれしも過度な注目は避けたいものだ。

「まあ、気持ちは分からなくもないがな。

でもマルコは、最初からこうなることぐらい予想できていたんだろっ?」

「う……確かにそうだが、でもやっぱり限度というものがある。

これじゃあただの公開処刑じゃないか」

「別に断られると決まってる訳じゃあるまいて。

……でもまあ、仕方ないか。日本男児だなんだと言って担ぎあげた僕が悪かったよ」

「だから、なんでその一言につられてきたという設定を押し通そうとしてんだよ。

クラスの連中もやたらと叫んでたし。

やっぱり君らは馬鹿なんだろう。もはやそれ以外に検討の余地もないほどの馬鹿だ」

「馬鹿馬鹿言っな!! 先生に言いつけるぞ!!」

「男の幼児退行なんて不快なものを僕に見せるな!! はあもう勝手にしろ」

「言ったな? 本当に勝手にしていいんだな?」

「ああ、もうどうにでもすればいいさ。君の相手は僕には荷が重す

ぎるよ」

なかば投げやりになるマルコに、少しやりすぎたかなあと心配する。

お詫びという訳ではないが、今日一日ぐらいはマルコをいたわってやるべきかもしれない

「こんにちは、イヴ先輩。僕は1年2組の秋山千秋と申します。そしてこちらで頂垂れているのが、同じクラスのマルコ・フェスタです。」

今日はこちらの彼が、先輩に折り入ってお願いがあると言つことで、伺わせていただきました。今お時間大丈夫ですか？」

なんちって。

「わかった。君は僕のことを嫌いなんだろう!？」

教室の入り口から教室の中を覗き込む形でイヴさんに声をかけた。それまで黙々と作業をしていたイヴさんの手が止まりこちらを見上げる。

それにつられて、彼女をそれとなく眺めていた周りのクラスメイトの方々の視線が、僕と、僕の右手にがっしりと掴まれたまま、頭を抱えて大きなため息をつくマルコにあつまる。

「あら、ご丁寧ありがとうございます。私はイヴ・タイラーと申します。

なるほど、あなたの方があのマルコ君と千秋君ですか。以前から一度お会いしたいとは思っていましたので、こうしてお話できるなんてとても嬉しいです」

「恐縮です」

急に押しかけたにも関わらず、年下の僕たちに大して丁寧に対応し、あまつさえ”嬉しい”とまで言われたら、恐縮せずにはられない。

甘いマスクに、一年生トップの もといトップクラスの成績を持つ才色兼備の彼には、入学して一ヶ月にしてすでに熱心なファンが結構な人数ついたと聞く。

いくらここが天下の九重高校とはいえ、通っているのは思春期真っ盛りの少年少女だ。

生徒間の恋愛沙汰なんかももちろんあるし、その辺は普通の高校生と何も変わらない。

そんな中で、マルコやイヴ先輩のような神に愛された人間は常に生徒たちの噂的であり、こうして学年を越えて名前が知られているのも当然と言えば当然だ。

そして、そんなマルコと行動を共にすることの多かった僕も、セツトで名前を覚えていたのだろう。

しかし僕自身は彼らのようなタレント性を持ち合わせている訳ではないので、少しだけ肩身が狭いというか、分不相応な扱いを受けているような気分になる。

そういった背景もあり、マルコならともかく、おまけのようなボジシヨンの僕にとっては、今のような多くの視線を一手に受けるような状況は、とても居心地が悪かった。

「ここではなんですし、場所を変えませんか？」

「あらあら、もしかして愛の告白ですか？」

場所の移動を提案した僕に、暖かい笑顔を少しも崩さずにあげつない場所にキラーパスを繰り出すイヴさんのせいで、一瞬にして周りの空気が凍る。

一気に刺すような視線が集中し、マルコの顔が真っ青になった。

「まあ、似たようなものです」

「他人事だと思って適当なことを言うのはやめる千秋！！

それにイヴさんも、二人とも僕を殺す気ですか！？」

告白なんてめっそもないです、僕だって流石に身の丈くらい弁えてます！！」

前半は僕とイヴさんにしか聞こえないような小さな声で、後半は周囲のギャラリーにも聞こえるような大きな声で釈明するマルコ。

この混沌とした状況が、未だに小首をかしげながらにこにこしているイヴさんを見ただけでは、天然の産物なのか、それとも故意に作られたものなのか、僕には判断がつかない。

もし後者なら、あるいはトラウマとしてマルコの心に刻み込まれ

る一場面にすらなりえるだろう。

その空間を逃げるように後にしたマルコに続き、僕とイヴさんは落ちついて話が出来る場所へ移動を開始した。

ブローグ 5

僕たち一行は落ちついて話せる場所を求めて購買部横のラウンジまできていた。

昼休みということであるの賑わいを見せていたが、流石にこちらの動向を露骨に伺ってくるような輩はおらず、おそらく会話に聞き耳をたてられている、ということもないだろう。

といっても、表向きの目的は和服を着てくれるように頼むだけなので人目を気にする必要もあまりないのだが、まあこちらの精神衛生上の問題だ。

それに、現状の把握、つまり今僕の身の回りに起きている諸々のアクシデントの実態把握、という言わば裏の目的を果たすためには、人目が少ないに越したことはない。

しかし、流石にマルコとイヴさんが揃うと否応なく人目を引くため、さつきほど露骨ではない、と言うだけで、こちらを見つめる視線がいつにもまして多いということに変わらないのだが。

「それで、お願いというのは？」

購買で飲み物を買った席に腰を落ち着けて早々、イヴさんが本題を切り出してきた。

それに答えるのは僕ではなくマルコの役目なので、黙ってマルコの話を待つ。

「あの、非常に不躾な話で恐縮なのですが、その……和服を、着て

いただけないものと……」

「いいですよ？」

「へ？」

しどろもどろで要領を得ないマルコの頼みに、間髪入れずに首肯するイヴさん。

いきなり断られることはないにしても、もう少し詳細くらい聞かれるだろうと覚悟してただけに、情けない声をあげたマルコの気持ちも少なからず理解できた。

「和服を着ればいいんですよね？」

私、昔から憧れてたんですよ、和服。

着たくてもそうそう手に入るものでもないし、レンタルして着るほどのきつかけもありませんでしたし。

そういう頼みなら喜んでお受けします」

なるほど、日本の女の子が異国のお姫様が着るドレスに憧れるようなものか。

マルコほどではないが、近年日本の文化に興味を持つ海外の人も増えていると聞く。

日本の伝統衣装に興味を持つ外国人がいても、さほど不思議なことではないのかもしれない。

「イヴさんは日本に來られて長いんですか？日本語も随分お上手で

すし……」

そこまで言つて、マルコが驚愕と困惑が入り混じった目をこちらに向けていることに気がついた。今にも口を空けて「は？何を言っているんだ君は？」と言わんばかりだ。

しかしその意味に気付く前にイヴさんから質問の答えが返ってくる。

「私は日本生まれ日本育ちですよ？

父はパシフィカ連合の出ですが、母は端系2世で、祖母の代からこの付近の住宅区に住んでいます。

幼少期に数年間だけ向こうに住んだこともありますが、小中学校だって地元の公立校に通っていたんですから」

しまった。

外見こそ日本人のそれとはかけ離れている、というか文字通り人間離れしているが、それと出身地とを結びつけるのは、あまりにも短絡的過ぎた。

日本にエルフが多い、というのは、単に観光客が多いという訳ではなく、日本に移住したエルフ族が結構な人数存在している、という意味だったのだ。

僕は馬鹿か。

外見から出身が判断できなことからい、僕が一番よくわかってい
る事じゃないか。

その上、小中共にこの近辺ということは、彼女も僕と同様七里塚

中学の出身ということだ。近辺に3校ある小学校とは違い、中学校は1つしかないので、少なくとも2年間は同じ校舎に通っていたことになる。

同校の出身とはいえ、1000人以上の生徒数を誇るマンモス校では互いの存在を知らないまま卒業していくことなんて特に珍しい話でもないのだが、ことイヴさんに限っては通用する話ではなかった。

一日、この学校の様子を見ていれば分かる。

同じ学校にいて彼女を知らないなんて、土台あり得ない話なのだ。

うかつだった。

当のイヴさん本人はどうかわからないが、この様子だとマルコはとつくに気付いているだろう。

同じ学校に通っていないながら、彼女の何を何も知らない”僕”という存在の異様さに。

しかしマルコはそれを口に出すことはなく、僕の代わりに話を引き継いだ。

その後、これ以上ぼろを出すわけにもいかず、かといって急に黙るのも不自然なので、適度に相槌を入れながら専ら二人の会話の聞き役に徹した結果、いくつか新しいことが分かった。

一つ目は、彼ら、つまりエルフや小人たちは、その殆どがパシフィカ連合国に住んでいる、ということ。

”パシフィカ連合国”というのは、太平洋の真ん中に突如出現した。僕の主観では、だが。パシフィカ大陸にある国だ。

その中に、小人族やエルフ族など、僕から見ればファンタジーの世界の住人たちが住んでいる、ということだ。

そして二つ目は、パシフィカ連合国から日本に移民してきた人は割と多い、ということだ。

イヴさんが先ほど言っていた端系というのは、パシフィック系の略称で、彼女のお父さんが2世らしいから、おそらくは戦後辺りにはすでに結構な人数いたのだろう。

これについてはなんらかの、おそらくは歴史的な背景があると考えていいだろう。

これらは、彼らにしてみれば他愛のない世間話なのだろうが、僕にとつては、この変化に他する仮説を立てる上でカギになるかもしれない、とても有益な情報だった。

その後、実際に和服を着てもらった日にちを決めたところで予鈴が

鳴ったので、次の授業がある教室へ行くためにラウンジを後にした。
目的地が別方向なので、イヴさんとはすぐに別れ、マルコと二人
っきりになった。

「なあ、千秋」

来たか。

「どうしたマルコ？次の授業始まるぞ？」

足をとめたマルコに、平全を装って尋ねる。
しかし、この二人つきりになったタイミングでしてくる質問など、
もはや考えるまでもなく”あれ”しかない。

「”どうした”だって？それはこっちのセリフだ。」

いったいどうしたんだ千秋？

今日の君は明らかに不自然すぎる。

何かあったなら教えてくれ、何もないならせめて何もないように
振舞って見せてくれ。

君の演技は下手くそで、ばればれで

「

見ていてイライラするんだ。

そう言い放って悲しそうな表情でこちらを見るマルコ。

この様子じゃ、僕に”何か”が起こった事を初期の段階で察していたのかもしれない。

こちらは気付かれないように細心の注意を払っていたつもりだったが、彼は何かしら違和感のようなものを抱いていたのだろう。

そして、先程の僕の一言だ決定打になった。

これだから頭がいいやつ相手は苦手なんだ。

しかし、彼に今僕の身の上に起こっている状況を話したところで、それを理解してもらえるだろうか。

今となっては僕にだって上手く説明できないかもしれない。

昨日まではなかったものがあって、ファンタジーの世界の住人が現実に出てきて、知らない人がいて。

果たして、こんな突拍子もない事を言い出して、はいそうですかと受け取ってもらえるのだろうか。

「まあ、言い辛いことならば無理には聞かない。

しかし、君のその憔悴しきった顔は見るに堪えない。目も当てられない。

黙っていたいなら、誰にも聞かれないのなら、もう少し隠す努力をしてくれ。もしそれを出来る自信がないなら、今すぐここで何があつたのか言ってもらおう。

それさえも出来ないのなら 君とはこれっきりだ」

弱ったな。

僕としてはうまく隠していたつもりだったのに、さらにそれ以上のクオリティを求められるのか。

決定打以外はどが悪かったのかも分からないのに、改善なんて

できないだろう。

いや、この期に及んでまだ僕は隠そうとしているのか？彼にここまで言わせておいて、僕は逃げる気にいるのか？

「少し、考えさせてくれないか？

僕の中でも、まだ答えが出ていないんだ。

でも、ちゃんと整理がついて、何があったのか、何が起きているのか、僕の中で決着がついたら、そのときはマルコに話すよ」

他人から信頼を勝ち得るのは、そんなに簡単なことじゃない。

一つ一つ石を積み上げて造る石の塔のような物で、絶妙なバランスを保ちながらそびえたっている。

しかし、その塔が高くなればなるほど、一つ選択肢を誤れば、一つ境界線を越えてしまえば、一つ力加減を間違えば、呆気なく崩れてしまう。

「……君はあくまで僕に頼る気はないんだね。

分かったよ。

ただし、連休が明けてもまだ答えが出ないようなら僕にも協力させて欲しい」

僕たちが作り上げた塔はまだ発展途上で、そこまで高いものではない。

それが信頼と呼べるものなのかどうなのかすら、正直僕にはまだ分からないし、彼にすべてを話すことで、せつかくここまで造った

塔が倒れてしまうことが、たまらなく怖い。

「ああ、そのときはよろしく頼む」

でも、このとき確かに、塔がより強固に、揺るぎのないものになったような気がしたのだ。

「次の授業はさぼる。」

先生によろしく伝えといてくれ」

そうマルコに一言残し、何か言われる前にその場を後にした。
あんな青春ドラマみたいないなり取りをした後で気恥ずかしいのと、今後の事を一人でじっくり考えたいのとで、あまりこの場にはいたくなかったからだ。

誰もいない場所を求めて屋上へ向かう。

この学校の屋上が別段閉鎖されていたりするわけではないのだが、昼休みが終わりもうすぐ授業が始まるこの時間帯にあんなところで油を売っている生徒はそうそういないだろう、と踏んでのことだ。

階段を一番上まで登り、屋上への扉に手をかける。

僕が正確に覚えているのはここまでだ。

後から聞いた話によると、どうやら僕はここで”気絶していた”らしい。

それが本当なのかどうかは、僕の知るところではない……。

一章 ー1ー

そろそろ僕の話をすると思う。

自分語りはあまり好むところではないが、物語を進める上ではある程度は仕方ないと割り切るしかない。

ここが例えば誰かが創作したライトノベルの中の世界ならば、それをわざわざ説明してくれるキャラクターもいるのかもしれないが、あいにくこの現実にはそんな都合主義存在しない。

小人やエルフはいるし、知らないところで新大陸や天才少女が現れるようなファンタジックな世界では、すでにあるのだが、しかしいくら非日常的なことが、例えば魔物やそれと戦う魔法少女が出てきたとしても、自己紹介をわかりやすくしてくれるキャラクターや、詳しい自分語りをする必要に迫られるような状況は、自分で作りでもない限り存在しないのだ。

ということ、まずはおさらいからだ。

僕の名前は秋山千秋、今年で16歳になる高校1年生だ。

なんの因果か世界最高峰の教育機関と名高い九重高校に入学し、そこで高校生生活を送っている。

偉大な父と美しい母との間に生まれた長男で、万能な妹の兄であり優秀なイタリア人の友人、というのが世間の僕に対する評価だろう。

成績は『そこそこ勉強ができる』程度、スポーツも一芸に秀でていると言うよりは器用貧乏タイプなのだが、球技から武道まで何でもできる妹の印象に引っ張られて、スポーツ系なら何をさせても軽くこなせる万能タイプと周りからは思われている節がある。

身長は179cm、体重は60kg弱。

スラッとしている、というよりはひよろつとしている、という印象をもたれやすい。

暗めのゴールドブラウンやダークブラウンに分類される、日の光にあててやつと若干薄いことが分かるような微妙な色合いの髪を目にかかるかからないか程度に伸ばし、それにワックスで動きを付けてなんとか高校生らしい外見を維持している。

もうひとつ付け加えることがあるとすれば、僕は、僕と紅葉の兄妹は日本とイギリス人のハーフだと言うことくらいか。

大した話ではない、ただ単に母がイギリス人だったと言うだけの話だ。

自己紹介はこれくらいで充分だろう。

性格や詳しい生い立ち、モラトリアム期の失敗譚なんかはここから先の話にはあまり関係がないし、僕には自分の恥をブロードキャストするような露悪癖もない。

そもそも先ほども述べたように、自分語りはあまり好きではないのだ、できるだけ早く終わらせたいと思うのが人の性だろう。

さて、そんな、一見特殊なようできて、その実あまり大したことのないプロフィールを持つ僕が、いったい何故このような状況になってしまったのか、いったい何故”彼女”に目を付けられてしまったのか、少し冷静に状況を整理してみる必要があるそうだ。

気がついたら知らない部屋にいた。

応接室だろうか、向かい合って配置された3人がけソファと、その間に置かれた木製のローテーブルには、意匠を凝らした芸術的な細工が施してある。

床に敷かれた絨毯は落ちついた色合いをしており、所々においてある照明器具やアンティークの壺も部屋の雰囲気にあつた物にそろえてある。

事務所の応接室、というよりは西洋風の館の応接間といった感じだ。

部屋には一つ窓があり、そこからは晴れ渡った青空が見える。

あれから　つまり僕が気を失ってから　それほど時間は立っていないだろう。

体感的には1、2時間といったところだが、今の僕にそれを確認するすべはない。

ひょっとしたら日をまたいでいる、なんて可能性もなきりしもあらず、といったところだ。

さて、話は変わるが。

どうやら僕は拉致監禁されてしまったらしい。

話の展開的にあまりにも突拍子のないというか、いきなり過ぎて僕としてもなかなか認めたくないところではあるのだが、そうしか言えないのだから仕方がない。

むしろ他に解釈の使用があるなら僕にレクチャーして欲しかった。

椅子型の拘束具　拷問具じゃないと願いたい　の肘置きに腕を固定され、両足とも動かないよう椅子の足に固定されていた。そりゃあもうかつちりと。

試してみるまでもなく、身動きが取れないのは明白。

もちろん移動なんてできる筈もないし、助けを呼ぼうにもポケットに入っている携帯電話まで手が届かない。

加えて先程も述べた通り、この場所に見覚えはなく、窓の外もこの場所からは一面の青空しか見えないため、現在位置すら把握できていない。

猿ぐつわやボールギャグの類はかまされていないため、僕さえその気なら大声を張り上げることできるのだが、満足に身を守ることはできない今のような状況下では、犯人の神経を逆でしかねない行為は避けた方が賢明だろう。

要するに手詰まりだ。

どうしてこうなった。

思い返してみたところで原因に心当たりはない。

何かしらの理由で意識を失い、気がついたときにはこの部屋で身動きの取れない状態になっていた。

もちろんその間の記憶はぶつとりと途切れているので、どういう経緯でこの部屋に至ったかは皆目見当がつかない。

しかし、目的や経緯に関わらず、僕が何者かの意思で拘束されているという事実は誰の目にも明らかだ。

この状況を100人が見れば99人は「お前は拉致監禁されている」と僕に教えてくれることだろう。

残りの1人はもちろん犯人だ。

そしてその残りの1人である可能性が一番高い人物、つまり『秋山千秋拉致監禁事件』の容疑者は　おそらく僕の目の前に悠然と佇んでいる”彼女”なのだろう。

一章 ～1～（後書き）

閲覧ありがとうございます。ご意見・感想お待ちしております！！

一章 〓

整った顔立ち、こちらを見つめる鋭い眼、腰まで伸びたウェーブがかった黒髪に耳元の髪飾りがよく映えている。

全体的に派手な印象はないが、しかしどことなく、自然と人目を引くような存在感を放っていた。

同じ学校の生徒なのだろう 九重高校の制服を身にまといはいるが、同年代の少女に比べ少し大人びた印象がある。

『彼女』は特に何かするでもなく、僕が気が付いて以来、現状把握に努めている間中、ただの一言もしゃべらずじっとこちらの様子を見ていた。

監視されているのか、はたまた観察されているのか。

例え前者であろうが後者であろうが、僕が拉致監禁の憂き目にあっていることに変わりはないのだけだ。

もう授業は終わったのだろうか 呑気にも、僕はそんなことを考えていた。

逃避気味に、と言ってもいいのかもしれない。

己の意識を受け入れがたい現実から逸らすために思い浮かんだ疑問に、しかし答えが返ってくるとは思いなかった。

「授業ならもう終わったわよ」

「……へ？」

予想していなかったせいもあり、全く心の準備ができていなかった

た。

綺麗で落ちついた、しかし全く抑揚がない声が自分の疑問に答え
てくれているのだということに気がつくまで少しだけタイムラグが
生じ、数瞬後に間抜けな声が口からこぼれる。

どうやら思考が口から洩れていたらしい。

「なんだ、ちゃんと喋れるじゃない。

暴れるどころか、うんともすんとも言わないから、気絶させたと
きのショックで脳に深刻な障害が残ったのかと心配しちゃったわ。

あー損した気分。一生物のトラウマになったらどうするのよ、謝
りなさい。」

「どんだけデリケートなんだよ！」

面識ゼロの少女、ともすれば拉致の容疑者に突っ込みを入れてし
まった。

いやしかし……こいつ無茶苦茶だ。抑揚のない平坦な声で理不尽
な言葉を並べたてられたら、そりゃ突っ込みはしないにしても、抗
議の声くらいあげて当然だ。

「あら知らないの？私は今日女の子の日なのよ？」

「知るか！

個人情報や世間一般の常識と同じ用に扱っくんじゃない！

あと機嫌が悪いのに理由があるのは分かるから、頼むから別の理
由でっちあげるなりなんなりしてもう少しばかりしてくれ！」

「うるさいわね。文字通り生理現象なんだから仕方ないじゃない。そんなんじゃないつまでたつても彼女出来ないわよ」

「ぐっ……余計な御世話だ」

いやいやいやいや。僕は一体何をしてんだ。

こいつはもしかしたら僕をこんな目にあわせた張本人かもしれないんだぞ。拘束されている身分で何を呑気に雑談しているんだ。

「ともかく、そろそろ何で僕がこんな目にあわなきゃいけないのか説明してくれないか？」

「いいわよ。」

私の名前はシノノメ シノ。

東西南北の東にスパイダーじゃない方の雲、ムラサキカガミの紫に乃木希助の乃で東雲紫乃よ。

九重高校通称”九校”に通う一年生の可愛い女の子、身長は160cm体重は40ないし50kg。

好きな食べ物……」

「別にプロフィールは聞いてないから！！

何で僕は拘束されてるのか聞いているんだ！！」

意外とすんなり説明してくれるのかと思いきや、すらすらと個人情報公開しだした東雲紫乃と名乗る少女。

僕をおちよくりたいのか、はたまた抜けているだけなのか、出会うって数分もたたない僕には判断がつかない。

それにしても。

東雲紫乃。

あのマルコをして越えられない壁と言わしめ、九重高校の伝統を
実力で捻じ曲げた張本人。

僕が知らないうちに世界最高峰と言われる教育機関の入学式で新
人生総代を務めた、誰もが認める天才。

その東雲紫乃が、この僕にいったい何の用なのだろうか。

「そう言えばあなた、なんで拘束されているの？」

「それを君が教えてくれるんじゃないの！？」
むしろ君が犯人だと疑ってすらいただけど」

「ピンポン、正解よ。

何を隠そう、私がこの拉致監禁事件の首謀者であり実行犯です。
よくわかったわね秋山千秋君。かしこいかしこい」

「……………」

そう言いながら無表情で僕の頭をなでてくる紫乃に、もはや言葉
も出ない。

明らかに遊んでいるだけじゃないか。

いやまて。

彼女はなぜ僕の名前を知っている？しかもフルネームで。

「御褒美に飲み物を出してあげる。」

バナナオレとカレーどっちがいい？」

「……えっと、バナナオレで」

何故その二択にしたのか、とか、カレーは食べ物だ、なんて野暮なことは言つまり。

形はどうあれ御馳走して貰っている身だ、失礼な真似は控えるべきだ。

いや、そんなことはどうでもよくて。

「なんで僕の名前を知ってるんだ？ 確か初対面だったよな、僕らは」

どこから取り出した紙パックのバナナオレにストローを刺す紫乃の動きがピタツと止まる。

何かあったのだろうか。

変化に乏しいその表情からは、彼女の心境を読み取ることはできない。

「ときに秋山君。ここ最近変なことなかった？」

僕の質問には答えず、代わりに一見無関係の質問を投げかけてくる紫乃。

変なこと、ねえ。

『同級生の少女に拘束された』ということ自体、充分変なことで考慮すべき事態ではあるのだろうか。

小人、新大陸、エルフ、いないはずの少女……。強いてあげるまでもなく、変なこと尽くしだ。

それらに比べれば、椅子に縛りつけられることの特異性なんて日常茶飯事レベルだ。

むしろ日課……は流石に言い過ぎか。

ともかく変なことなんていくらでもある、それこそ枚挙に暇がない。

しかしそのことを誰かに話した覚えはないし、『秋山千秋に何かがあった』ということ自体、気付いているのは今のところマルコと可能性は低いだろうがイヴさんくらいだ。

もちろんついさつき出会った　といえるのだろうか　紫乃がその一連の出来事を知っているはずもなく、したがって質問の意図するところは別にあると考えるべきなのだろうか……。

どういう反応をするべきかいまいち決めかねていると、紫乃が口を開いた。

「どんな些細なことでも結構よ。」

例えば、妹が彼氏を連れてきたとか、目が覚めたら性転換していたとか、猫の話声が聞こえるようになったとか、あとはそうねえ

極端に小さいおじさんが家を訪ねてきたとか」

僕の目を見つめながら質問に補足をする紫乃。

一見沈黙を見かねて助け舟を出してきたように見えるが、しかしいきなり問題の核心を突くような単語が出てきたことに思わず反射

的に目を大きく見開く。

そのいかにもな反応に紫乃が満足気な表情をみせた。

どういうことだ？

『小人が訪ねてきた』というのは僕にとっては一連の奇妙な出来事の始まりで、殊更特別な意味を持っている。

変わったこと、と言われればまず真っ先に思い浮かぶのがこれだ。そのことは認める。

しかし、だ。

この異様な世界を何の疑問もなく謳歌する彼女にしてみれば、変わったことでも何でもないはずだ。

ならばなぜ、変わったことの例としてその事柄が出てくるんだ？

それ以前に

なぜ彼女は、東雲紫乃は、僕の家小人が訪ねてきたことを知っているんだ？

「グリコ、もういいわよ」

混乱して声も出せずにいると、紫乃が僕ではない誰かに声をかけた。

「やっとか。

これ持続さんの疲れんだよね」

そして、その声に僕ではない誰かの声がかんえた。
声の主を探そうと視界を巡らすが、どこにもいない。

「おいおいどっち見てんだよ。
ここだよ、ここ」

声が出た方に目を向けると、紫乃の右肩の上に見覚えのある緑色の小さいおじさん　森永グリコが座っていた。

「千秋からしてみれば今朝ぶりってことになるな」

今朝早くに妹を訪ねてきて、いないと分かるや否や煙のように姿を消した小人族のみすばらしいおじさん。

一連の奇妙な出来事の始まりであり、異様な存在第一号。
その張本人が、つい今しがた紫乃の肩の上に姿を現した。

「僕からしてみれば、ってどういうことだよ」

「そのまんまの意味だ。」

それ以上でもそれ以下でもない。

主観が変われば視点も変わり、そこから見える景色も変わる。

今お前の目の前でおしゃべりをしている奴も、お前にとっては早朝出くわしてそれっきりの神様のような何かでも、紫乃にとってはただの使い勝手のいい小人で、役所にとっては戸籍をもつ有権者で、その他大勢にとってはよくいる小人族のおじさんでしかない」

「つまり僕からしてみれば今朝以来だけど、おじさんからしてみればそうではないと」

なんて回りくどい奴だ。

「物分かりがいいな。そうだ、お前が言った通りだ。
今朝からずっと、このお嬢ちゃんに命令されてお前を監視していた。」

だから、お前にとっては今朝ぶりかもしれないが、俺にとっては今さら挨拶するのもはばかれるような顔見知りってわけだ。

あと、俺はグリコだ。おじさんじゃない、今朝自己紹介したばかりだろうが」

監視？

つまり、最初に煙のように姿を消したのは瞬間移動ではなく、ただ単に透明になって姿を隠していただけだったようだ。

ということは今不意に姿を現したように見えたのも、実際は前からそこにいて、合図とともに可視化したのだろう。

しかしどうやって？

ただ単に、なんて言ったが、もちろんそんな軽い気持ちで透明になることなんてできない。

光学迷彩なんてSFチックなものは存在しないし、僕の記憶が正しければ今の技術では透明になること自体不可能なはず。

いや。

今日一日、僕の記憶や今まで培ってきた常識と呼ばれるものが役にたった試しがない。

僕にとっては奇妙で異様な出来事でも、目の前に佇む彼らにとっては当たり前のことなのだろう。

「それじゃあ紫乃、なんで僕は監視されてたんだ？グリコからは紅葉に用があるって聞いたんだけど」

そして紅葉は今旅行中で家にはいない。

代わりに僕で用事を済まそう、って訳ではなさそうだけど。

紫乃に命令されたってことは紫乃が一番詳しいだろう、ということとで紫乃に答えを促す。

「確かに、これにお遣いを頼んだ最初の目的はあなたの妹、紅葉ちゃんだったわね。

でもなぜ千秋君を監視させたかと訊かれたら、うーん、的確な答えが思い浮かばないわね。

あなたに興味をもったから、かしら」

「興味？」

「そう、興味。

千秋君、あなた最初にグリコを見たとき明らかに動揺を隠そうとしてたでしょ？

普通に考えればグリコは不法侵入を犯している訳だし、下手すれば警察沙汰になってもおかしくはない状況だった。

ところがあなたは何故か平静を装って、あまつさえ普通の客人と

同じ様に対応して見せた。

つまりあなたは『グリコが家の中にいたこと』ではない何かに動揺していた。

これが興味を持ったきっかけ」

なるほど。

こちらとしては異常を悟られないように動揺を隠していたのだが、そこに違和感を持たれてしまったのか。

これだから頭のいい奴の相手は苦手なんだ。

「まあ、最初は紅葉ちゃんに会えなかったから暇つぶしにでも、と思つて千秋君の様子を見ていたのだけど」

見ていた、というのは、言葉通り何らかの方法で僕を”見て”いたということだろう。

グリコを通して、カメラか何かで撮影した僕の映像を紫乃に送り、それを監視していた、というところか。

「これが予想以上に面白くって」

本当に面白かったのだろう。

平時より若干トーンが高い声でそう言った紫乃の瞳が、心なしかキラキラと輝いて見えた。

一章 〽 2 〽 (後書き)

感想お待ちしています！気長に待ちます！

一章 〓

そこからの紫乃の話は、客観的に考えればなるほど興味をそそられて然るべき内容だった。

ワイドショーで世界地図を見た途端ひっきりなしにチャンネルを変えたり、旅先の妹に訳のわからない事を尋ねたり。

朝食を食べながら、或いは学校の登校中に見せた奇行の仔細を他人の口から聞かされるのは、しかしながら精神的にくるものがあった。

加えて学校についても、さりげなく情報収集をしていたり、失言をして友人に問い詰められたりなどなど。

僕の今日一日をダイジェストでまとめたらこんな感じになりました、みたいなの。

もうね、紫乃然りマルコ然り、誰も見ていない、誰にもばれていないと思っていた行動の真意をいとも容易く看破してしまいやがって。

一人相撲を同じ学校の同級生にお披露目していたのかと思うとめちゃくちゃ恥ずかしい。

「……で、勢い余って監禁しちゃいました、と」

「大まかに言えばそんなところね」

「いやいや大まかに言えば……。
そもそも興味を持ったから監禁って、どう考えても短絡的すぎんだろ。」

「どうやってそんな発想でてくんだよ」

「そうかしら？」

わりと合理的な手段だと思うけど」

「まず合法的な手段をとってくれ。合理的かどうかはその次だ」

「いいじゃない別に。誰かが損してる訳でもないでしょ」

「どこのDQNの言い分だ！そもそも目の前に損を被っている人がいるだろう！！」

「どんだけファンキーな思考回路してるんだよ。そもそも勢い余って監禁つて。あまつた勢いを逃がすベクトルを完全に間違えてると思う。」

「今さらだが僕は本当に無事に帰してもらえるのだろうか？僕の妹も相当ぶっ飛んでるが、流石に興味本位で人を拉致するほど酷くはない……はず。」

「……なによ、私が変人だとしても言いたいなの？」

「そんなこと一言たりともいつてないだろうが！！」

「言いたいかどうかで問われれば否定できないがな！！と心の中で威勢を張る。初対面の少女に面とむかって言うのははばかれるが、紫乃は正真正銘の変人だ。疑う余地などない。」

「しかし、僕なりに気を遣ったこの一言も、紫乃には逆効果だったらしい。」

「ほう。これを見てもまだそんな呑気なセリフを吐けるかしら？」

不敵な笑みを浮かべながらこちらに歩み寄ってくる紫乃。僕の一言で変なスイッチが入ったみたいだ。手が届く距離で立ち止まると、右手を僕の頬に向けてゆっくりと伸ばしてきた。

「な、何をする気だ！」

嘘だろ?! 何を思っただけで自分が変人だと言っただけを証明しようとしてるんだ彼女は?!

あーまずい。このままじゃ回避できない。頭を必死に遠ざけて抵抗の意思を見せるが、そんなことお構いなしな彼女は更に一歩踏み込んで右手をそつと僕の頬に……

「あの、もしよろしければあなたのそのに、にき、にきび、つつつ潰させてもらっても、い、いいいいいいでしょうか？」

「そんじょそこらの変人とは危なさのレベルが違う!？」

まさかニキビを潰させて欲しいと頼まれる日が来るとは思わなかった。

幸いなことに僕のニキビが潰されることはなく(そもそもニキビなんてない)ひとしきり僕の頬をこねくり回した紫乃は、ホットド

ツクのソーセージのみを落としてしまったときのような表情を浮かべて元の立ち位置に戻っていった。

なんだよ今の一連の流れ。演技だと分かってても怖いわ。

……演技、なんだよな？というか演技であって欲しい。もはや一生に一度のお願い使うレベル。

「でもどうせ『変な美少女につかまっちゃったラッキー』とか思ってるんでしょ？」

「普通に何事もなかったかのように会話をリスタートしてきやがった！お前今さっきのことなかったことにしようとしてるだろ！！そんなに恥ずかしがるくらいなら最初から挑戦するんじゃないやねえよ！……」

「……でもどうせ『変な美少女につかまっちゃったラッキー』とか思ってるんでしょ？」

あくまでごり押しする気らしい。

「……少なくともラッキーだとは思ってないがな！！」

仕方なく紫乃にあわせる。美少女の件は悔くしいが否定できないが肯定するのも癪くなのでノータッチ。

「でもどうせ『はやくカレーが食べたいでござす』とか思ってるん

でしょ？」

「僕を戦隊物のイエローみたいなポジションにしようとするな！！」

ちくしょう、乗ってやった途端にこれだ。なぜ僕がマルコみたいな扱いを受けにやららん。

とはいえ、痛みを知ったからと言ってマルコに同情したり、これまでの自分の行動を反省しようとは少しも思えないから不思議だ。

「そう不安がらなくてもいいわ。厳密に言えば監禁は目的ではなく手段だから。

千秋君をこのままにしておくつもりはないわ、ね？安心でしょ？」

「ね？じゃねえよ！！どこに安心すればいいんだよ！むしろ一気に警戒心が増したよ！」

駄目だ、このままだと確実に駄目だ。何が駄目かと問われれば具体的に思いつかないが、なんかもう本能的に駄目だ。早いうちに何とかしないと精神が持たない。

「……で、僕はいったいどうなるんだ？」

「そんなことより千秋君。あなた、今自分の身に何が起きているのか興味ない？」

「え？いや、そりゃ勿論興味あるけど。

……まさか、何か知ってるのか？」

え？なんだこの急展開。

話を本題に戻そうとした僕のナイスパスをそんなことで一蹴し、『ああ、失敗した』と絶望する間もなく予想だにしない角度から剛速球を叩き込まれた。

今、僕に何が起きているか。

興味がない訳がない。今朝からずっと考えてきたことだ。

しかし、なぜだ？

紫乃は一体何を知っている？

「別に知ってる訳じゃないわ、限りなく正解に近い仮説があるだけでもその仮説の正しさを証明するためにはまだ情報が足りない」

「……で、その穴を埋めるために情報が欲しい、と」

補足した僕の言葉に紫乃がこくりと頷く。

仮説の証明。

なるほど、それが僕を拘束している目的か。

根っからの研究者気質（のはず）である彼女が知識欲を満たすために、答を持つ可能性がある僕を拘束したのも分からない話ではない。

いや、一般的な感覚からすれば異常そのものなのだが、この学校にいる生徒は一般人と呼ぶには些か変わりものが多い。多少の奇行は仕方のないものとして扱われることが多い。

紫乃も同じだ。

いわゆるマッドサイエンティスト的な側面を、紫乃は持っているに過ぎない。

ただそれだけのことだ。

そう考えると、拘束と言う手段も情報を得るためには合理的なのかもしれない。

……いや、マシな手段ならいくらでもあるか。

やっぱ紫乃は変だ、揺るぎなき変人だ。

ままとにかく。

そんな変人でも九重高校随一の天才だ。

限りなく正解に近い仮説がある、だなんて随分確証めいた物言いをするあたり、よほどの自信があるのだろう。

「……わかった、協力しよう」

今の状況的には協力と言うより強制に近いものがあるが、僕としても渡りに船な訳で、やはりこの場合は協力とする方がいいのかもしれない。

「ありがとう。」

まず、あなたの口から事情を聞きたいわ。

行動の理由、違和感を感じたこと、そのとき立てた仮説。今回の

話に関係あると思ったところはどんな些細なことでもいいから全て話して。

まあ出来れば生まれたときから今までのことを根ほり葉ほり聞きたいところだけど、それは流石に可哀そうだから、どこから話すかは千秋君にまかせるわ」

いやいや生まれたときからて、僕の伝記でも書くつもりか。

ともかく。

こういう経緯で僕は紫乃に奇妙で異様な体験の全てを赤裸々に語ることになった。

大まかなことはグリコを通して知っていたため、理由や背景の説明が主だった。

昨日までは、小人もエルフもパシフィカ連合国も東雲紫乃も透明になる技術もない。しかしそれ以外のことは殆ど何も変わらない、そんな世界で暮らしていたこと。

異変の始まりはグリコとの邂逅だったこと。

異変が起こった可能性としては、脳の異常や記憶喪失などの内的要因と、この世界自体が何らかの理由で変化した、といった外的要因が考えられること。

異変が起きた理由を棚上げして何がどう変わったのか、情報を集めていたこと。

それらについて、できるだけ詳しく、心情から何から可能な限り再現して説明した。

途中紫乃からの質問に答え、足りないところは補足し、紫乃が興味を持ったところは掘り下げる。

特に昨日以前の話、つまり異変が起こる前の世界に興味を持ったらしく、法律から科学技術から、随分といろんな事を尋ねられた。

興味の触手が歴史の分野まで伸びようとしたところをグリコが止めてくれなかったら、おそらくゴールデンウィークの全てを彼女とおしゃべり。という名の尋問。に捧げなければいけなくなっていただろう。

ちなみに、その間拘束具が外されることはなく、依然椅子に固定されたまま身動きが取れないでいる。随分前から手首だの尻だの痛くて堪らないのだが、そんな僕のSOSは一切聞き入れてもらえていない。紫乃曰く「だってあなたは逃げるもの」らしい。この期に及んで逃げるつもりなんてないんだけどな。

そんなこんなでかくかくしかじか。

マルコの青春の1ページについて語り終えた頃には、すでに辺りが暗くなっていた。

もう喉からっから。

何度飲み物を要求しても、選択肢はバナナオレかカレーの二択もちろん飲むのは前者で、小腹が空いたと言いながら持ってきたのもカレーとバナナひと房だった。

そんなんで喉の渇きが潤う訳もなく、むしろ飲むたびに水分を奪われながら、案外紫乃はアホの子なのかもしれない、と思ったりもした。

しかしなんだよバナナとカレーって。小学校の給食かよ。

そういえば昔は両方とも大好物だったな。バナナは毎日のようにおやつ感覚で食べていたし、カレーに至っては給食に出る度にかわりをめぐってクラスの男子と乱闘騒ぎを起こす程に入れ込んでいた。今思えば友情やクラスでの名誉を犠牲にしてまで手に入れるカレーにどれ程の価値がある！！って感じだが、まあ昔は若かったと言っことで。

なんて、そんなまったくもってどうでもいいことに思いを馳せるくらいには、今の僕は疲弊しきっていた。

注意力が散漫になって一つの事に集中できないタイムだ。

しかしそんな僕とは対照的に、紫乃は黙って何かを考え込んでいる様子だった。

僕から得た情報を整理しているのだろう。あるいはどう説明するべきか考えているのかもしれない。

紫乃の肩にのっていた筈のグリコは、いつの間にかいなくなっ

いた。

否、見えなくなったただけでまだその辺にいるのかもしれない。僕にはそれを確認するすべがない。

そのまま5分くらい経っただろうか。

「さて、まず結論から言っと」

紫乃がおもむろに口を開いた。どうやら考えがまとまっただけらしい。

「秋山千秋君、あなたは異世界の住人です」

「……………は？」

一章 4

「秋山千秋君、あなたは異世界の住人です」

「……………は？」

思わず聞き返した。異世界？何をまたファンタジックなことを……………。

「さて、まず結論から」

「いやいや別に聞こえなかった訳じゃないから。

え？今”異世界の住人”って言ったよな？いせかいってあの異世界？異なる世界と書いていせかいと読む異世界？」

「そう、その異世界。パラレルワールド、別の世界線、並行世界、呼び方はなんでもいいわ。

重要なのはこの世界とあなたが昨日までいた世界は別物だということよ」

「……………まず根拠をお聞かせ願いたい」

とりあえず思考停止モードに切り替えて紫乃に話の先を促す。信じるのも否定するのも、とりあえずは全てを聞いてからだ。

「それ以外に考えられないからよ。」

まず、あなたが考えていた仮説、内的要因についてだけど、幻覚を見ているかもしれない、と言う説は考慮するに値しない。

説明は必要？」

「まあ、確かにその通りだが」

内的要因、つまり脳の異常に伴う幻覚や、記憶喪失についてだ。

前者は言わずもがな、幻覚に伴って現れるはずの症状が見られないため、まずありえないだろうと先程結論がでている。

「次に記憶喪失についてだけど、本来記憶喪失というのは記憶を失うものであり記憶が変化するものではない。それが心因性のものなら無意識のうちに記憶をねつ造している可能性もあるけど、その性質上ねつ造の対象は自身の身边に限られ、国や人種を忘れたりはない。脳の外傷が原因なら、意味記憶を司る領域を損傷した場合に限ってモノが持つ意味自体を忘れてしまうこともあるけど、それでもあなたのように一部の国や人種を忘れるなんて脳の構造上まずあり得ない。他にも記憶を失う原因はあるけど、この場合どれも検討するに値しないからパス。よってあなたの説は間違っている」

なんとも理路整然とした話し方である。いろいろ小難しい話をしていたが、要するに記憶喪失のメカニズム的に僕みたいに一部の人や国や技術や人種が存在を忘れることはない、ということらしい。

「次に、世界が何らかの理由で変化したって話だけど、確かあなた、

昨日の下校中から今朝起きるまでの記憶がないのよね？」

「どうやらそうみたいだな」

先程紫乃に説明していて気付いたのだが、昨日学校から出て途中夕食をすますために定食屋に寄ったところまで覚えていたのだが、その後、どのように家に帰って、いつ風呂に入り、寝る前に何をしていたのか、まったく思いだせないのだ。それこそ記憶喪失にでもなったかの様に。

これはとても不思議な感覚だった。いくら頭をひねっても昨日のことは何も出て来ず、代わりに今朝夢でみた屋上と強い光が邪魔をするように頭をよぎるのだ。この得体のしれない何かに騙されているような感覚が、どうにも不思議で不快だった。

「そして今朝目が覚めたら常識や環境が一変していた。

それってつまり、それらもろもろの変化のきつかけとなった出来事が記憶が無い空白の時間に起きた可能性が高い、ということになるのよね？」

「ああ」

相槌を打って話の先を促す。

「でもそれはあなたの主観的な問題であってこちらからすれば何も変化なんてしていない。あなたからすれば存在し得ない筈の人物だっ
てちゃんとあなたの事を知っているし、あなたからすればなかつ

たはずの出来事もちゃんと辻褄が合うように世の中に溶け込んでいる」

確かにイヴさんは僕のことを知っているみたいだし、紫乃も本来ならば学年トップである筈のマルコに代わって新入生総代で答辞を読み上げている。

透明になったりだとか未だによく意味の分からないものもあるが、今のところ何も矛盾は生じていないし、確かにみんな何事もなく普通に過ごしている。

「この場合世界の理を大改変してみんなの記憶を挿げ替えてるってことになるんだけど、もし私が主犯なら絶対にそんなめんどくさいことしないわ」

「ちょい待て主犯？つまり誰かの意思が介在してるってこと？」

「こんなことが自然に起こるとはとも思えない。ないとも言い切れないけど、『数々の偶然が重なった』よりも『神様がちょっかい出してきた』の方がまだ説得力あるわ」

科学者であるところの紫乃が神様を信じる、と言うのも素人目に見れば違和感があるのだが、まあ今は仕方ないだろう。

「確かにそうだな。つまり、世界が変わったのではなく、僕の記憶が神様の意思によって書き換えられたって事か」

「そんなわけないじゃない。そもそもなんの変哲もない石ころのような高校生の頭の中に変な記憶植え付けてなんのメリットがあるのよ。思い上がりも甚だしいわ」

「そこまで言わなくても……」

説明の合間に人に罵詈雑言を浴びせるのがこும்上手い女子高生も、いくら日本広しといえども紫乃くらいのものだろう。

「それに加えて、あなたの記憶にも少し問題があるのよ。さっき聞いた限りではあなたの記憶に矛盾はなかったし、何と言うか、作りものにしては出来過ぎてる感じ」

「出来過ぎ？」

そののどこが問題なのだろうか。記憶を書き換える以上矛盾が生じないようにするのはある種当たり前だと思うのだが。

「そう。誰も得しないしなんの影響も及ぼさないあなただけの記憶の癖にやたら細部まで凝ってるし、そんなことする目的が全くみえないのよ」

「言われてみれば」

全く現実にはぐわらない記憶を緻密に設計して人の脳を書き換える

ことに、いったいどれほどの意味があるのだろうか？という話だ。

「そういうところから鑑みて、世界が変わったとか記憶が変わったとかより、あなたが別世界から来た異世界の住人、って方がしっくりくるのよ」

一章 5

「いやまで、いきなり随分すつ飛ばしてないか？その二つの可能性が消えたからって異世界に結び付けるのは少し短絡的過ぎる気がするぞ。そもそもその異世界って発想はどこから出てきたんだよ」

「あーめんどくさいわね、私説明すんの嫌いなよ。
あなた確か今朝夢を見たって言ってたわよね？その夢の内容覚えてる？」

めんどくさいと言いつつも話を進める辺り紫乃もなかなかのツンデレだな。

「ああ、結構鮮明に覚えてるぞ」

近所にあるビルの屋上で見た飛行する物体。その直後に辺りを包んだ強い光。これ紫乃にも説明済みで、おそらくそれについての事を尋ねているのだろう。

「それ、多分夢じゃなくてあなたの身に実際に起こったことよ。
あなたはおそらく定食屋でご飯を食べ終えた後、もしくは食べている途中に何らかの原因でその飛行物体に興味をひかれ、外に飛び出して屋上に上って見たところ強い光に包まれたって感じがしら」

「ん？どういうことだ？」

……いや確かに定食屋から出た記憶はないし、思い出そうとする
と何故かその夢にいきつくんだけど……いやでも、あれが現実？」

いや、確かに筋は通っているのだけど、どうにもすんなり受け入
れられない。

「……とりあえず、仮にあれが現実だったとして、それと今僕の身
に起きていることになんの関係があるんだよ」

「厳密に言えば現実とは少し違う。あれはあなたが元いた世界で起
きた出来事なのよ。これはただの仮説にすぎないのだけど、おそら
くあなたが見た飛行物体は大量破壊兵器で、それがあなたが住んで
いるところの近くに落ちた。結果あなたは吹っ飛んで死んでしまっ
た。いや、死ぬはずだった」

紫乃は一度そこで言葉を区切り、こちらの反応をうかがうように
僕の顔を正面から見た。

大量破壊兵器、ねえ。なんか、こう言ったらあれだが、ここにき
て急に胡散臭さが増した気がする。いや、今自分が置かれている状
況も相当胡散臭いし、何を今さらって感じではあるんだけど。

紫乃の言い分を聞く限り殆ど予想に近い感じだし。

不信感が表情に出ていたのか、紫乃は少し慌てたように話を進め
た。

「けどあなたは死なずに何らかの原因でこちらの世界に飛ばされてしまった。千秋君からの説明を聞いただけの現状ではまだ仮説の域を出ないのだけど、これが一番可能性が高いと思うの」

「何らかの原因ってあれか？魔法少女に召喚されたとか？」

「魔法少女は召喚魔法なんて使えないわ、ふざけないで」

「いやいや魔法少女いるのかよ……」。

「僕にいわせりゃそっちこそふざけんなって感じだけだな。なんだよあれだけ自信満々に言ってたくせに結局仮説の域をでないって。そもそも異世界が存在するって根拠はどこにあんだよ」

これまでに紫乃に募っていた不信感が思わず口をついて出てきた。確かに紫乃の言っているは分からないことでもない。可能性としては今のところそれが一番高いのかもしれない。

しかし、ようやく答が見つかる期待していただけあって、裏切られたというか、失望感というか、そういうもやもやしたものが今まで着実に蓄積されてきたストレスに引火して爆発してしまった。

「それも、まだ仮説であって、その、証明はされていないけど、でも、その……少しでも、千秋君の助けになればって……思っ……」

これまでの経験上怒涛のように言い返して理詰めで論破されるん

だろうなー、あー何で口答えしちゃったんだろうなー、とぼんやり後悔していたら、しかし紫乃の様子ががらりと変わった。今までとは一変して、おどおどしたというか、声にも先程までの覇気が感じられないし、視線もうつ向き気味で一定方向に定まってないし。というか、え？泣いてる？

「いや、そのあれだ、確かに少し言い過ぎたと言っかなんというか……」

こちらも負けじとしどろもどろである。涙をたたえた少女と必死に取り繕う拘束具に縛られた男子高校生の図。この世のものとは思えぬ酷い有様だった。

「ごめん…なさい。そりゃ怒る……よね。いきなり監禁されて、質問攻めにされて、それでも大切なことは分かんなくて……カレーとバナナも……少なかったし……」

惜しい！途中まであつてるけどカレーとバナナはそこまで重要じゃない！だなんて瞳に涙をためながら必死に謝罪する少女に言える訳もなく、もはや何と声をかけていいのやらわからずに途方に暮れるばかり。

口調まで若干違うし。というかこの子誰！？俺こんな子知らない！！

「今は、その、はつきりしたところまでは分かんないけど、でも、

もう少し、調べたら、きっと、分かります。だから、その、これからも協力してもらいたくて……あ、その、すみません。厚かましいこと言つて、やっぱ、駄目、ですよ……ね？」

消え入りそうな声でつぶやく紫乃。もはやうつむきすぎて表情すらうかがえないが、それでも高校一年生程度の脆弱なメンタルではこんなよわよわしい声で頼みごとされてむげに断るなんて真似は出来るわけもなく。

「いやいや全然駄目じゃないから……僕も詳しく知る必要があるし……！」

あっさりOKしてしまった。

「……ほんと？」

「ほんとほんと……むしろこちらこそよろしくお願いします……！」

それどころかこちらが頼み込む有様である。我ながら、げに男とはバカな生き物よと思わないこともないが、もはやそんなことどうでもいい。はやくこの状況をどうにかしたい。

にもかかわらず、紫乃はと言えば未だにうつむきながら鼻をすすっている。

うーむ、どうしたもんか。まさか幼児退行するほどとは……。

「よし分かった！僕が紫乃研に入ろう！そしたら好きなときに調査出来るし、まあ紫乃の研究の手伝いはできるかどうかわからないけど、雑用とか力仕事ならできるし！」

「ほんとに！？」

「ああ、ほんとだ」

ぱつと顔を上げた紫乃の目を見てゆっくりと頷く。もちろん安心感を与えるためににっこりとほほ笑むことも忘れない。妹を持つ兄をなめるな。

それを聞いた紫乃の顔がぱあっと明るくなる。どうやら納得してくれたようだ。

と、どこからかカチツ、という音が聞こえた気がした。

「ちよろいな」

「え？」

あれ？紫乃さん？今なんかちよろいになって……

「グリコ、もういいわよ」

「たく、小人遣いが荒いこつて」

え？何これ何この状況？全然意味分かんないんだけど。
急に何事もなかったかのように普通に喋りだす紫乃と、僕と紫乃の間に姿を現したグリコ。そして、グリコの手には

「ボイスレコーダー？……はッ！？まさか！？」

「うふふ。助かったわ、研究室を持ったはいいものの人手がなくて困ってたのよ。そんなときにサンプルと助手が同時に手に入るなんて。たなぼたたなぼた」

はめられたー！！

どうやら僕を紫乃自身の研究室にとり込むために一芝居うつたらしい。それに僕はまんまと引っ掛かって隠れて録音していたグリコに言質をとられたという訳だ。我ながらなんと情けない。

何が妹を持つ兄をなめるなだよ。あーもう恥ずかしいし隠居したい。

「……はあ、まあ別に他の研究室に行きたいところがあった訳でもないし、特に問題はないんだけど。にしてもあれだ。やり方が癪だ。なんだよこのプライドをぼつきりおられた気分」

「それでは、あなたを栄えある紫乃研メンバー第一号に任命いたします。色々よろしくね、秋山千秋君」

そう言いながら、とても嬉しそうに右手を差し出す紫乃。今日一番の笑顔だ。これが演技なのかどうかは分からないが、とても輝いていて、心を奪われるような笑顔だった。

というつか。俺が第一号らしい。本当に大丈夫なのかここ。

「……なあ紫乃、握手を返そうにも右手が動かないんだが」

椅子に座ったまま無意識に持ち上げようとした右手には、依然拘束具ががちりとはまっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3977z/>

マジ ぽわ

2011年12月17日20時49分発行